

令和4年度指定

新時代に対応した高等学校改革推進事業

(普通科改革支援事業)

研究開発実施報告書  
[学際領域学科]  
[第2年次]

和歌山県立新宮高等学校

令和6年3月



はじめに

和歌山県立新宮高等学校 校長 深野泰宏

本校は、明治34年（1901年）に開校し、創立122年目を迎えており、和歌山県新宮・東牟婁地方において長きにわたり教育・文化・スポーツの中心的役割を担ってきた歴史と伝統のある学校です。

本校は、令和4年度より「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の「学際領域」に係る調査研究の指定校に採択され、昨年度に引き続き、第2年次の取組を行いました。日本社会や国際社会では様々な課題に直面しており、答えのない課題に対して、様々な視点をもった周囲の人々と協働しながら、状況を多角的に分析して、いかに解決していくかが求められています。

また、少子高齢化や人口減少により、当地方では、生徒数が急激に減少しており、本校と近隣の県立新翔高等学校が令和8年度に再編整備することが、令和5年12月に和歌山県教育委員会から発表されました。両校のこれまでの歴史や伝統、取組を継承・発展し、新たな時代の学びの創造をめざした学校づくりを進めているところです。本校では、再編整備に向けた準備はもとより、学際領域の新学科設置については、統合校の各学科のスクールポリシーや教育課程との全体的なバランスを考慮しつつ慎重に検討しているところです。

本校では、令和5年度入学生から、学校設定教科・科目「くまの学彩」を各学年に開設しました。令和5年度は、第1学年の「くまの学彩」で「地域」・「国内」・「国外」・「共通」の4つのカテゴリと「観光」・「環境」・「防災」・「歴史」などのジャンルを組み合わせ、外部講師による講演会や校外学習などを通じて、生徒の興味・関心の幅を広げ、実社会の諸課題にふれさせることができました。来年度の第2学年「くまの学彩」に向けて、探究のテーマを決定させ、本格的な探究活動につなげることが今後の課題です。今年度は、一部の分野で事前学習を実施しましたが、今後は、講演会等の内容を精査するとともに、講演会等の事前事後に生徒がしっかり考えることができる機会をもつことも必要であります。

来年度は、第2学年の「くまの学彩」において、教員で内容等の情報を共有するとともに、生徒が主体的に探究活動に取り組み、教員が生徒に伴走できるよう学校全体で組織的な運営をしていくことが重要であると考えています。

最後に、今回の事業推進にあたり、ご支援とご指導をいただいた文部科学省はじめ県教育委員会、大学、関係機関、地元関係者、運営指導委員会、コンソーシアムやコーディネーターの皆さまに厚く感謝申し上げます。

## 目次

### はじめに

I	事業の概要	1
1	研究の背景	2
2	研究開発の目的・目標	3
3	研究開発概要図	4
4	ロジックモデル	5
5	研究開発の概要	6
6	事業の実施体制	7
7	令和5年度の事業の実績	7
	(1) 事業の実施日程	7
	(2) 事業の実績の説明	8
	① カリキュラムの検討内容・教育課程について	8
	② 「総合的な探究の時間」について	12
	③ 学校設定教科・科目「くまの学彩」について	12
	④ 授業研究について	12
	⑤ コーディネーターの配置および活動内容	13
	⑥ 運営指導委員会の体制および取組	14
	⑦ コンソーシアムの体制および取組	15
	⑧ 事業の説明・広報	16
	⑨ 成果普及のための取組	16
8	目標設定シート	17
II	具体的な研究開発報告	18
1	教育課程	19
2	「総合的な探究の時間」	21
3	学校設定教科・科目「くまの学彩」	27
4	授業研究	32
III	運営指導委員会報告	41
1	第1回運営指導委員会(1)	42
2	第1回運営指導委員会(2)	49
3	第2回運営指導委員会	54
4	第3回運営指導委員会	61
IV	次年度以降の活動について	62
	今年度の成果と今後の課題について	63
	成果概要図	64
V	資料	66
1	スクールポリシー	67
2	事業取組状況発表資料	68

# I 事業の概要

## 1. 研究の背景

本校は紀伊半島の南部、新宮市に位置する県立の普通科高等学校である。創立120年を超える歴史を持つ地域の伝統校として、新宮・東牟婁地方における教育や文化の中心的役割を担ってきた。当地方の最高学府の意味を込めて「熊野大学」と呼ばれていたこともある。現在は、各学年5クラス、生徒数583名である。生徒の約9割が進学希望で、毎年国公立大学には30～40名、私立大学には約80名の生徒が進学している。部活動についても、多くの生徒が仲間とともに切磋琢磨し、全国大会や近畿大会等にも多数出場している。また、本校は国際交流にも力を入れており、姉妹校である台湾彰化女子高級中学校との定期的な交流や、ESS部を中心とした海外とのオンライン交流等に積極的に取り組んでいる。

しかし、当地方では少子高齢化、過疎化が全国に先んじて進んでいる。当地方の中学校卒業生徒数はピーク時（平成元年度）の約半数となっており、さらに15年後には現在の約70%まで減ることが予想されている。加えて、地域経済の活性化や、近い将来起きるとされている南海トラフ大地震への対策等も地域の課題である。また新宮市は首都東京からの時間的距離が最も遠い市であるのみならず、県庁所在地の和歌山市までも車で3時間以上かかるなど、他地域との往来も簡単ではない。

これらの課題を抱える一方、「熊野」は、自然・文化・歴史が豊かに息づく地域であり、地域資源に恵まれている。「紀伊山地の霊場と参詣道」は世界文化遺産に登録され、近年は来訪者も増えている。「熊野」は『古事記』から近現代の文学まで、様々な作品の舞台となり、能や歌舞伎においてもバリエーションをもって描かれている。「熊野」は「熊野」ならではの精神性や文化を持ち、人を惹きつける。さらに近年、当地方では、盛んな林業を生かす形で木質バイオマス発電事業が開始されたり、ロケット発射場が整備されたりする等、科学分野での新たな取組も目立っている。このように、幅広い教育資源に恵まれた本校は、まさに分野の枠を超えた学際的な学びの実現にふさわしい場所であると考えられる。また、ICTが普及し、Society 5.0時代の到来が近づくなか、他地域との物理的な距離はもはやデメリットではない。

本校は、新宮・東牟婁地方においては勿論、「熊野」という和歌山県から三重県、奈良県にまたがる一文化圏において、地域の中核校として大きな期待や役割を担う。近隣に大学や大企業がない中で、まさに地域の教育機関として、①人材育成、②社会教育の機能、③研究の機能が求められている。学業や進路実現の面でも、部活動の面でも、私立高等学校や他地域の高等学校に進学しなくても十分な学びや活動が保障されるようにという地域からの願いは強い。地域の中核校として、地域社会を担う人材の育成のみならず、本校から日本や世界に羽ばたき、リーダーシップを発揮して世の中を牽引していく人材、イノベーターとして世の中を革新していく人材の育成が期待されている。

社会の諸課題の多くは、分野の枠を超えたものであり、それらに立ち向かい、対応していく力を育成するためには教科横断的な学びを実現する先進的なカリキュラムを開発、実践していく必要がある。この地域ならではの教育資源と、外部機関との連携に支えられる複合的・総合的な最先端の学習カリキュラムにより、地域から世界に羽ばたき、活躍する人材の育成を実現するために、学際的な学びを推進する学際領域学科の設置に向けて研究する意義は大きいと考える。

## 2. 研究開発の目的・目標

### (1) 学際領域学科における取組の目的・目標

学際領域学科での学びを通して、自身の気づきや問いに誠実に向き合い、視野を広げ、物事を多面的・包括的に捉えて、人や文化・自然を大切にできる生徒を育成する。より良い社会を創るため、周囲と連携・協働しながら地域社会を担い、「熊野」から日本や世界に羽ばたき、リーダーシップを発揮して世の中を牽引していけるよう、またイノベーターとして世の中を革新していく存在となれるよう、多様な領域の連携を重視した学際性の高いカリキュラムを実践し、次のような資質・能力の育成を目指す。

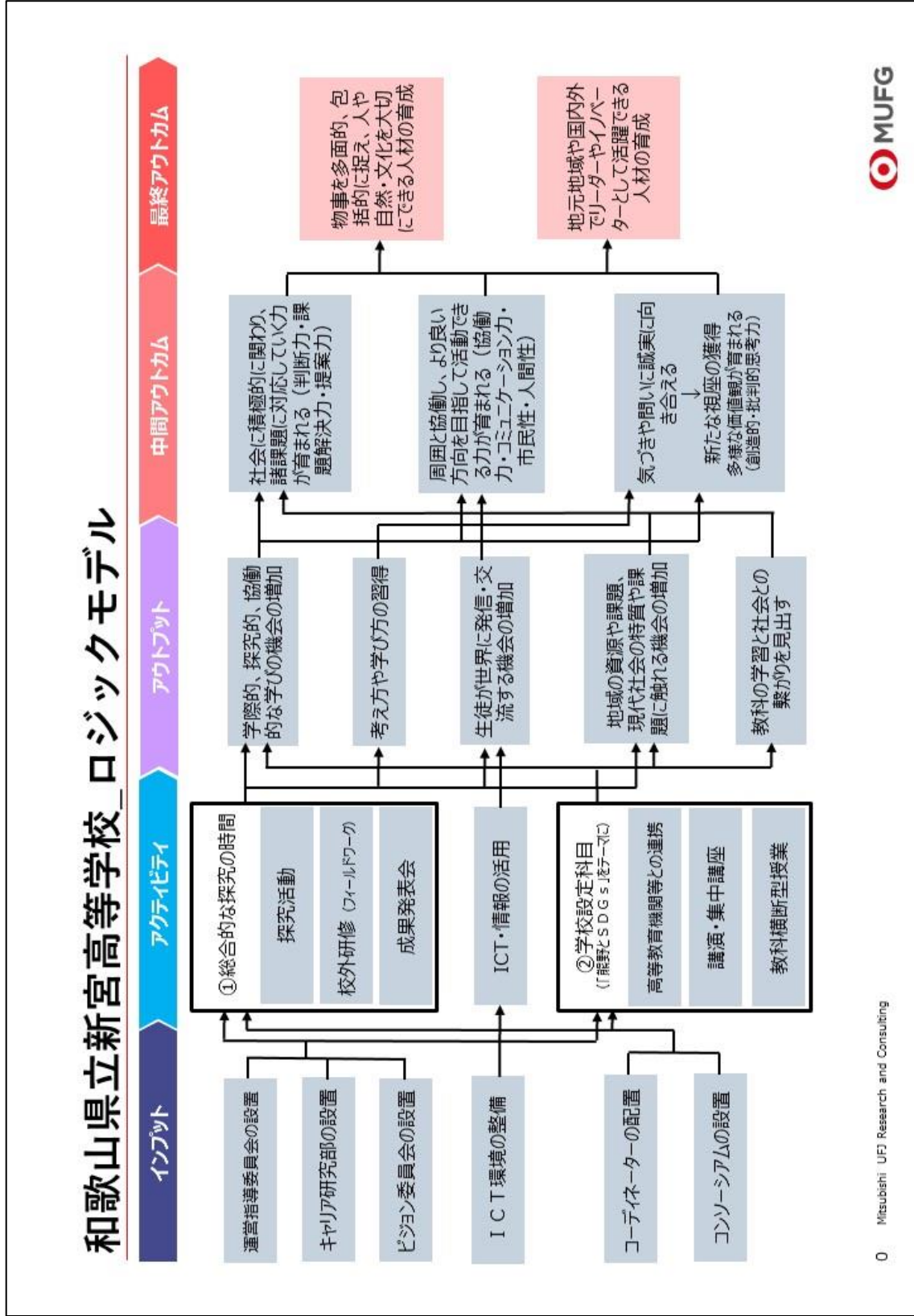
### (2) 育成を目指す資質・能力

- ① 分野にとらわれない幅広い知識と豊富な技能を身に付け、それらを活用できる力。  
(実践力・判断力・語学力・コミュニケーション力)
- ② 課題を見つけ、その解決に向けた取り組みを主体的に進められる力。  
(批判的思考力・課題解決力・提案力)
- ③ 自身と社会との接点を見出し、SDGsの観点を踏まえて、社会に積極的に関わっていかうとする力。  
(批判的思考力・実践力・市民性)
- ④ 強くしなやかで思いやりのある心を持ち、多様な他者とより良い方向を目指してともに活動できる力。  
(豊かな人間性・協働力・創造力)
- ⑤ ICTを用いて的確に情報を活用し、Society 5.0時代を生き抜く力。  
(情報活用力)

3. 研究開発概要図



4. ロジックモデル





## 5. 研究開発の概要

本校は、「『くまのSpirit』で新時代を創る!」をモットーに、学際的な学びを通して「熊野」から日本や世界に羽ばたき、リーダーシップを発揮して世の中を牽引していきける、またイノベーターとして世の中を革新していく人材の育成を目指し、学際領域学科において、多様な領域の連携を重視した学際性の高い学びの実践に取り組む。具体的な取組として、次の3点を挙げる。

1点目は、「熊野」の地域資源を生かした探究学習である。この「熊野」ならではの精神性や文化、歴史、自然などを教育資源と捉え、「総合的な探究の時間」を中心に探究学習に取り組む中で、新時代を生きる視座の獲得と周囲と協働して社会に積極的に関わっていく力を養成する。現在でも和歌山県新宮市は首都東京から時間的距離が最も遠い市であると言われるが、ICTの普及で、遠方の大学や研究機関との連携も可能である。「熊野」に縁のある大学等の高等教育機関、研究機関、ユネスコ等によるコンソーシアムを構築し、連携協力体制を整備することで、学校だけではできない最先端の学びを取り入れ、探究学習を充実させる。

2点目は、学校設定科目「くまの学彩」を設定し、分野を超えた包括的・総合的な学びを実現する。この科目では、広い視野の獲得と考え方や学び方の習得を目指す。本校ではこれまで、本校出身でさまざまな分野で活躍されている方に講義をいただく「先輩が先生」や、フィールドワークを含めて地域について学びを深める学校設定科目「吉野熊野学」の実施などを長年行ってきた。これらの取組を生かし、外部講師による講演やフィールドワーク、教員による集中講座など、幅広い分野でのインプットの機会とそれをどう捉えるかを考える機会を設定する。また、新聞を主体的に読むことなども取り入れる。その中で、熊野を知り、世界を知ることができるよう、探究活動も併せながら学ぶ。SDGsの視点やSociety 5.0時代の到来も意識させる。

3点目は、各教科、科目での教科横断型授業の計画的な実施である。総合的な探究の時間や学校設定科目を軸として、他の教科・科目においても縦割りの学問領域に縛られることなく、教科、科目間で連携しながら教科横断的に学びを深めることができる授業を実践する。探究活動に必要な様々なスキルや関連知識、探究心をくすぐる学習活動にアプローチできるよう各教科の授業においても検討し、積極的に進めていく。

## 6. 事業の実施体制

### (1) 学校全体の事業実施体制について

校長を本校における事業の統括責任者とし、教頭及び校務分掌におけるキャリア研究部（8名＋コーディネーター2名）が中心となって、事業を実施した。

キャリア研究部は、部長と各学年から1名以上の部員で構成され、コーディネーターもキャリア研究部に所属している。進路指導部とも連携を密にし、包括的に生徒のキャリア形成を支えていく体制を保持した。

また教務部と連携しながら学際的な学びを進めるカリキュラムの開発や、学校設定科目に予定している「くまの学彩」の内容の精査等に取り組んだ。

研究開発・推進に関わる各取組については、必要に応じて校務運営委員会や職員会議に諮った。また、校内教職員で行う校内研修や職員会議等で取組についての説明を行った。

### (2) 運営指導委員会等における事業の進捗管理

新学科設置に向けたカリキュラム開発・探究学習・「くまの学彩」等について運営指導委員会やコンソーシアム会議で指導、助言を受けた。いただいた意見や評価を踏まえて、事業計画を改善しながら取組を進めている。

### (3) 生徒、教職員へのアンケートによる事業の進捗管理

取組ごとにアンケートを作成し、調査を行った。

## 7. 令和5年度の事業の実績

### (1) 事業の実施日程

実施日程	事業項目
4月	
5月	●学校設定教科・科目「くまの学彩」（1学年）開始
6月	●第1回運営指導委員会
7月	
8月	●大学訪問（三重大学／探究的な学びの一環として）
9月	●先進校視察（福岡県立八幡高等学校、福岡県立城南高等学校、京都市立堀川高等学校、和歌山県立向陽高等学校）
10月	
11月	●研究授業（探究的な学びを取り入れた授業） ●第2回運営指導委員会
12月	●研究授業（探究的な学びを取り入れた授業） ●総合的な探究の時間（2学年）ポスター発表会 ●学校訪問対応（福岡県立八幡高等学校）

1月	●総合的な探究の時間（1学年）クラス内発表
2月	●研究授業（探究的な学びを取り入れた授業） ●総合的な探究の時間（1学年）学年内発表 ●第3回運営指導委員会
3月	●研究授業（探究的な学びを取り入れた授業）

## (2) 事業の実績の説明

### ①カリキュラムの検討・教育課程について

#### 1) 令和4年度の検討内容

令和4年度5月よりビジョン委員会を設置し、主に以下の2点(A)・(B)を踏まえた上でどのような教育課程を編成することが望ましいかを検討してきた。さらに、(A)に関して、教科横断的な取組や科目設定の端緒を探るため、ビジョン委員会が中心となって教科横断型授業の試行にも取り組んだ。

##### (A) 学際的な学びを実現できるような教育課程

現状の教育課程においては2年次より文系・理系のコースに分かれてしまうため、選択科目において制約となる。実社会で様々な課題に接するなかで必要となる教科など生徒の多様な学習ニーズに対応できるような仕組みを考える。

##### (B) 幅広い進路希望に対応できる教育課程

本校生徒の進路希望は多岐にわたっている。また、令和4年度入学生より新教育課程が始まり、令和7年度より大学入学共通テストも大幅に変更されるため、今後の大学入試の動向も踏まえた科目設定が必要である。

#### 2) 本年度のカリキュラム（令和5年度入学生より）

##### (A) 学際的な学びを実現できるような教育課程

2年次よりのコース制を廃止して、生徒が学びたい科目を選択して一人一人が自分に合ったカリキュラムをデザインできるようにした（2年次は11単位、3年次は19単位の科目を選択）。ただし、これは大幅な変更であり、生徒や保護者の不安が大きくなることが予想されたため、進路希望に応じて、科目選択のパターンを複数提示した。

##### (B) 幅広い進路希望に対応できる教育課程について

1年次は必履修科目を中心に配置し、2・3年次は学校設定科目も含めた選択群を設定している。令和4年度当初考えていた教育課程から大きく変更した点は以下の3点である。

(ア) 2年次に全員が「数学B」を履修する形であったが、生徒の学力差が大きいという現状を踏まえると1年次までの学び直しをできるような科目を設定するという観点から「基礎数学」の講座を開設することとした。

(イ) 2年次の選択科目「芸術Ⅱ」「情報Ⅱ」「化学総合」について

・別の科目選択群で「化学」があり、現状も化学総合を選ぶ生徒は非常に少ないので学際的な学びの観点からも別の科目の設定について議論した。その中で、2年生は部活動の中心となる学年で、体育が2単位であることから、特に運動部の活動の充実のことも踏まえて、生徒の希望に応えられるような科目の設定として「体育探究」を設定するという結論に至った。

・令和7年度の共通テストでは新たに「情報Ⅰ」の科目が設置されるが、急速に進展する情報社会で活躍できる力をつけるためには、1年次の2単位だけでなく2年次にも「情報Ⅰ」の内容を踏まえた探究や演習ができるような科目が必要であるとして、学校設定科目の「情報活用」を設けるという結論に至った。今後、「情報Ⅱ」を設けることについても検討を進めている。

(ウ) 3年次の選択科目「公民探究」「倫理」「政経」について

令和7年度の共通テストの公民科目においては、「公共+政経」もしくは「公共+倫理」のセットでの受験となるため、2年次に公共、3年次に政経か倫理どちらかを必ず学習できるような形に変更した。

[令和4年度入学生 教育課程表]

令和4年度入学生教育課程表

普通科		普通科								和歌山県立新宮高等学校 全日制	
学科・類型		標準 単位数	1年 A類B類	α			β			履修単位数	選択上の注意点
教科等	科目等			2年	3年		2年	3年	履修単位数		
					α1	α2					
国語	現代の国語	2	2						2	1年次 ※は1科目選択  2年次 < α > ○より1科目選択 △より1科目選択(芸術は継続科目) < β > ☆はいずれかをセットで選択  3年次 < α1 >選択生 ●より1科目選択(継続科目を選択) ▲より1科目選択 (芸術は継続科目)	
	言語文化	2	3						3		
	論理国語	4		2	2	2	2	4	4		
	文学国語	4		2	2	2	2	4			
	古典探究	4		2	2	3	4.5		5		
	※国語探究				2			0.2			
	地理総合	2	2						2		
	地理探究	3		○ 3				0.3			
	歴史総合	2	2						2		
	世界史探究	3		○ 3				0.3			
日本史探究	3		○ 3				0.3				
※世界史研究				● 4	● 4		4	4			
※日本史研究				● 4	● 4		4	4			
※地理研究				● 4	● 4		4	4			
公民	公倫	2		2					2		
	政治・経済	2							2		
	政治・経済	2			◎ 3	◎ 3	0.3	0.3	5		
	政治・経済	2			◎ 3	◎ 3	0.3	0.3	5		
数学	数学Ⅰ	3	4						4	< α2 >選択生 ●より1科目選択(継続科目を選択) ◎より1科目選択 ▽より1科目選択  < β > ★より1科目選択 ◇より1科目選択 ◆または◆2をセットで継続科目を選択	
	数学Ⅱ	4		4					4		
	数学Ⅲ	3							4		
	数学A	2	2						2		
	数学B	2		2					2		
	数学C	2				2	0.2		2		
	※数学探究				2			0.2			
	※数学探究2					4	0.4		4		
	※数学探究3							0.4	4		
								2	2		
理科	物理基礎	2							2	☆ 2 0.2 2 ◆1 2 0.4 2 4 4 ☆ 2 ◆2 2 0.4 2 12 ◆1 3 0.3 3 3 ◆2 3 0.3 0.2	
	物理	4							2		
	化学基礎	2	2						2		
	化学	4							4		
	生物基礎	2		2					2		
	生物	4							2		
	地学基礎	2	2						2		
	※物理探究								2		
	※化学探究					▽ 2	0.2		2		
	※生物探究						0.2		2		
	※地学探究					▽ 2	0.2		2		
	※理科探究				2		0.2		2		
	※化学総合			△ 2			0.2		2		
	保健	体育	7~8	3	2	3	2	7.8	9		2
体育探究				△ 2			0.2	10	2		
保健		2	1	1			2	11	2		
芸術	音楽Ⅰ	2	※ 2				0.2		0.2	2 4 6 0.2	
	音楽Ⅱ	2		△ 2			0.2		0.2		
	音楽Ⅲ	2			▲ 2		0.2		0.2		
	美術Ⅰ	2	※ 2				0.2		0.2		
	美術Ⅱ	2		△ 2			0.2		0.2		
	美術Ⅲ	2			▲ 2		0.2		0.2		
	書道Ⅰ	2	※ 2				0.2		0.2		
	書道Ⅱ	2		△ 2			0.2		0.2		
	書道Ⅲ	2			▲ 2		0.2		0.2		
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	4						4	20 22 2 2 2	
	英語コミュニケーションⅡ	4		5					5		
	英語コミュニケーションⅢ	4			5	5	5		5		
	論理・表現Ⅰ	2	2						2		
	論理・表現Ⅱ	2		2					2		
	論理・表現Ⅲ	2			2	2	2		2		
	※英語探究				2		0.2		2		
家庭	家庭基礎	2		2			2	2	2		
	情報Ⅰ	2	2				2	2	2		
	※情報活用			△ 2			0.2		4		
情報	※プログラミング入門				▲ 2		0.2		6		
	共通科目計		33	33	33	33	99	33	33	99	
専門科目計											
合計			33	33	33	33	99	33	33	99	
ホームルーム活動			1	1	1	1	3	1	1	3	
総合的な探究の時間		3~6	1	1	1	1	3	1	1	3	
総合計			35	35	35	35	105	35	35	105	

[令和5年度以降入学生 教育課程表]

令和5年度入学生用教育課程表

普通科			学校名				和歌山県立新宮高等学校 全日制			
教科等	各教科・科目等	標準単位数	1年次 A類・B類	2年次	3年次	履修単位数	教科別履修単位数	備 考		
教科等	科目等							選択上の留意点		
国語	現代の国語	2	2			2	13 15 17 19	1年次 ※は1科目選択		
	言語文化	2	3			3				
	論理国語	4		2		2				
	文学用語	4		☆2	▲2	0.4				
	古典探究	4		2		2				
	※国語探究					★2		0.2		
	地理総合	2	2			2		4 11	2年次 ○より1科目選択 ▽より1科目選択 ☆は ①文学国語＋芸術Ⅱ ②文学国語＋情報活用 ③文学国語＋体育探究 ④化学 から1パターン選択 (芸術Ⅱは芸術Ⅰの継続科目を履修)	
	地理探究	3		□3		0.3				
	歴史総合	2	2			2				
	世界史探究	3		□3		0.3				
日本史探究	3		□3		0.3					
※世界史研究					■4	0.4				
※日本史研究					■4	0.4				
※地理研究					■4	0.4				
公民	公 民	2		2		2	4		□は ①地理探究 ②世界史探究 ③日本史探究 ④物理＋数C ⑤生物＋数C から1パターン選択	
政治・経済	2				●2	0.2				
数学	数 学 I	3	4			4	14 18 21	3年次 ●より1科目選択 ■より1科目選択 (継続科目を履修) ▲より1科目選択 (継続科目を履修) ◆より1科目選択 ★より1科目選択 ▼は ①数探2＋理探2 ②数学探究 ③数学Ⅲ から1パターン選択 (芸術Ⅱは芸術Ⅰの継続科目を履修)		
	数 学 II	4		4		4				
	数 学 III	3			▼	4			0.4	
	数 学 A	2	2			2				
	数 学 B	2		▽	2	0.2				
	数 学 C	2		□	1	★			2	0.2, 3
	※基礎数学	2		▽	2				0.2	
	※数学探究					▼			4	0.4
	※数学探究2					▼			2	0.2
	※数学探究3					◎			2	0.2
理科	物 理 基 礎	2		△	2	0.2	6 8 9 12 22	3年次 ●より1科目選択 ■より1科目選択 (継続科目を履修) ▲より1科目選択 ◆より1科目選択 ★より1科目選択 ▼は ①数探2＋理探2 ②数学探究 ③数学Ⅲ から1パターン選択 (芸術Ⅱは芸術Ⅰの継続科目を履修)		
	物 理	4		□	2	▲			2	0.4
	化 学 基 礎	2	2			2				
	化 学	4		☆	4	0.4				
	生 物 基 礎	2		△	2	0.2				
	生 物	4		□	2	▲			2	0.4
	地 学 基 礎	2	2			2				
	※物理研究					◆			2	0.2
	※生物研究					◆			2	0.2
	※化学研究					■			4	0.4
	※生物探究					◆			2	0.2
	※化学探究					◎			2	0.2
	※相学探究					◎			2	0.2
	※理科探究					▼			2	0.2
体育	体 育	7～8	2	2	3	7	9 11			
	※体育探究			☆	2	2				
芸術	保 健	2	1			2	2 4 6			
	音 楽 I	2	※2			0.2				
	音 楽 II	2		☆	2	0.2				
	音 楽 III	2			◎	2			0.2	
	美 術 I	2	※2			0.2				
	美 術 II	2		☆	2	0.2				
	美 術 III	2			◎	2			0.2	
	書 道 I	2	※2			0.2				
書 道 II	2		☆	2	0.2					
書 道 III	2			◎	2	0.2				
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	4			4	18 20			
	英語コミュニケーションⅡ	4		4		4				
	英語コミュニケーションⅢ	4			4	4				
	論理・表現Ⅰ	2	2			2				
	論理・表現Ⅱ	2		2		2				
論理・表現Ⅲ	2				2	2				
※英語探究					◆	2	0.2			
情報	※家庭基礎	2		2		2	2 2 4 6			
	情 報 I	2	2			2				
	※情報活用	2		☆	2	0.2				
	※プログラミング入門	2			◎	2			0.2	
総合	共 通 科 目 計		32	32	32	96	96			
	※くまの学彩Ⅰ	1	1			1				
	※くまの学彩Ⅱ	1		1		1				
	※くまの学彩Ⅲ	1			1	1				
学校設定科目計		1	1	1	1	3				
合 計		33	33	33	99	99				
ホ ー ム ル ーム 活 動		1	1	1	3	3				
総 合 的 な 探 究 の 時 間		1	1	1	3	3				
總 合 計		35	35	35	105	105				

## ②「総合的な探究の時間」について

- ・原則毎週金曜7限に実施し、担任が担当する。探究活動を体験させることで、その手法や技術の上達を図ることを基盤としながら、学習指導要領に示された目標を達成できるよう、実施していくものとする。
- ・1年次には、主に探究活動の基本的なスキルの習得を主たる目標とし、探究活動の概要の説明後、学校で設定したテーマや課題に対して生徒が自ら問いをたて、短期的なサイクルで複数回探究活動を体験させ、理解と上達を図る。
- ・2年次は、1年をかけて一つのテーマや課題について探究活動を実施する。中間発表の機会を設けて、課題の修正を行いながら2学期後半に探究発表会を開催する。発表会には1年生も視聴・評価する立場として参加させる。その後、発表内容を論文にまとめる。
- ・3年次には、2年次に実施した探究活動の内容をもとに、これまでの探究活動の成果をふり返ってまとめ、進路探究を通じて自己の在り方・生き方について考える。

## ③学校設定教科・科目「くまの学彩」について

- ・原則金曜6限に実施し、副担任が担当する。「地域」・「国内」・「国外」・「共通」の 카테고리から、歴史・環境・観光・医療などさまざまなジャンルの、実社会の課題について、外部講師の講演や校外学習などを行い、2年次の探究活動に向けて興味・関心の幅を広げることを目的とする。
- ・今後の持続性を考慮して、各分掌で主催していた外部講師の講演などを整理して「くまの学彩」へ組み込む、公的機関の出張講座を利用する、オンライン講義の形態で依頼するなどの工夫を行う。
- ・「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」とで探究活動の基盤を養うとともに、自分たちを取り巻く世界への好奇心を刺激し、興味・関心を持った事柄に対して、自ら進んで探究し突き詰めていく姿勢を育てたい。そして、外部団体主催のコンテストや体験学習について積極的に生徒たちに紹介・奨励し、自主的に課外活動にチャレンジする生徒を増やしていきたいと考えている。

## ④授業研究（教科横断型授業、探究的な学びを取り入れた授業、ICTの活用）について

学際的な学び・分野融合型の学びを実現するため、令和4年度は教科の枠を越え、複数のグループをつくり、教科横断型授業を計画・実施した。それを受けて、今年度は各教科で「探究的な学びを取り入れた授業」・「ICTを活用した授業」を複数回実践し、教職員全体で探究学習について考えた。

⑤コーディネーターの配置および活動内容

1) 配置

2名を配置し、1名は原則として週3日・一日あたり4時間の勤務、もう1名は原則として週4日・一日あたり2時間の勤務とし、必要に応じて勤務日数を増減した。当初想定したコーディネーターが取り組む内容は以下のとおりである。

(ア) 学校及び外部とのコーディネート

外部の様々な機関と学校との連携にかかわるコーディネート業務の全般を行う。学校設定科目や探究活動に伴う関係機関との連携、学校及び関係機関への情報提供、専門性をもつ指導者の発掘やマッチングなど、連携先の拡充に係る業務についても行う。

(イ) 探究的な学習活動のファシリテーションに係る業務

総合的な探究の時間や学校設定科目の授業での取組内容の企画や支援を行う。また、各探究活動や学習内容に係る専門家の招聘、県や地域が有する専門的な施設や設備を使用した授業の企画調整にもあたる。

(ウ) 生徒募集や広報活動に係る業務

生徒の募集や学校の教育活動の広報及び魅力化に係る業務全般を担当する。

2) 活動内容

令和5年度に実際に行った活動内容は以下のとおりである。

(ア) 関係機関との連携、企画調整及び運営補助等に関する業務

・第1回運営指導委員会、第2回運営指導委員会、第3回運営指導委員会の運営に関する補助の業務を行った。

(イ) 学校の取組や生徒募集の広報に関する業務

・広報資料作成の補助を行った。

(ウ) その他の業務

・コーディネーター研修への参加

オンライン研修	①8/22、②9/8、③10/5、④12/11、⑤1/10
対面研修	①7/13・7/14 島根県民会館
	②11/21 福島県立ふたば未来学園
	③2/21 文部科学省

- ・エコシステム研究会への参加 8/28、12/15
- ・高校コーディネーター全国フォーラムへの参加 2/22
- ・「総合的な探究の時間」ポスター発表会の参観 12/19
- ・学校訪問対応（福岡県立八幡高等学校） 12/19
- ・「新宮参詣曼荼羅図」の英語絵解きに係る支援

令和5年10月に開催された「2023年度わかやまユネスコ・コンGRESS」に有志生徒が参加し、「新宮参詣曼荼羅図」の英語絵解きと活動内容を発表した。新宮ユネスコ協会と連携しながら、絵解きの英訳作業など生徒の発表活動をサポートした。



⑥運営指導委員会の体制および取組

1) 体制

所属	氏名	
和歌山大学	丸山 範高	和歌山大学教育学部教授
和歌山大学	二宮 衆一	和歌山大学教育学部教授
和歌山県教育委員会	中谷 郁夫	指導主事
和歌山県立医科大学	上野 雅巳	地域医療支援センター長
ヤマネ・いきもの研究所	湊 秋作	生物多様性研究センター客員研究員
新宮市役所	富田 英之	教育委員会企画委員

2) 取組

学校教育に専門的知識を有する者、学識経験者、関係行政機関の職員等6名によって組織し、先進的な学校設定科目の設置等のカリキュラム開発や、「総合的な探究の時間」における生徒の探究学習等の取組が、目標実現に向けて着実に進められているか、事業の進捗状況を学期ごとに確認し、専門的見地から指導、助言及び評価をいただいた。主な内容は、以下の通りである。

(ア) 第1回 6月21日(水)・6月28日(水)

- ・1年次の「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」の各々の内容と相互の関係性は整ってきたので、2年次・3年次の「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」について、独自性を保ちながらも相互に関連付けられる内容を考えていく必要がある。
- ・1年次の「総合的な探究の時間」で探究の基礎を学ぶ過程で、生徒たちが探究を楽しめるものだと思う活動を取り入れるべきである。
- ・3年次の「総合的な探究の時間」の内容を、1年次・2年次で学んできた探究の成果を何らかの形で表現するようなものに再検討してもよい。
- ・探究の成果のみならず、探究のプロセスそのものを生徒にまとめさせている学校もある。新宮高校も独自のものを考えてみてはどうか。
- ・探究のスキルを生徒に学ばせるにあたって、教員も探究について勉強する必要がある。
- ・1年次の「くまの学彩」で、ふり返しシートを記入させた上で、それを共有する時間を設けた方がよい。ふり返しを共有することでさらに深まる。
- ・生徒が探究学習を行うにあたり、各学年で生徒のテーマの枠組みを考えること。課題や問いは生徒が見つかるが、枠組みは学校が適切に設定すること。

(イ) 第2回 11月24日(金)

- ・1年次の「くまの学彩」で、観光・環境・歴史・医療などのジャンル分けをして講演会や校外学習を行っているが、そのジャンルを今後はより精選し、バランス良く配置することが必要である。
- ・1年生に探究活動をイメージさせるために、1年次の早い段階で3年生の成果発表を見せるのはどうか。3年生にとっても、探究の過程をふり返し、探究の成果をまとめ、それを表現する機会になる。

- ・紀南地域の医療について探究する際には医療の専門家にアドバイスを受けるなど、外部の専門家と連携するとよい。
- ・生徒のふり返しシートや探究の成果物が現状は紙ベースでの保管となっているため、今後は電子化して保存できるシステムを構築すべきである。
- ・令和6年度以降の探究に向けて、「生徒をどのようにグルーピングして活動させるのか」「意欲が不十分な生徒にどのように動機付けをするのか」「生徒の活動のどんなタイミングで専門家と生徒をつなぐのか」などを、ノウハウを持つSSH認定校等を視察して、早期に学ぶ必要がある。

(ウ) 第3回 2月28日(水)

令和5年度の取組についての報告  
令和6年度に向けての課題への指導・助言

⑦コンソーシアムの体制および取組

1) 体制

機関名	代表者名
和歌山大学	丸山 範高 ・ 二宮 衆一
南紀熊野ジオパークセンター	本郷 宙軌
和歌山県世界遺産センター	田堀 国浩
東京大学	河野 龍也
東京医療保健大学	上田 優人
和歌山県立医科大学	上野 雅巳
ヤマネ・いきもの研究所	湊 秋作
新宮ユネスコ協会	中谷 剛
国立スポーツ科学センター	久木留 毅

2) 取組

コンソーシアムは高等教育機関、研究機関を中心として構成している。また、特定の分野に偏ることなく、様々な分野の研究者、有識者に協力いただくことで、複合的な視点をもった連携・協力体制を構築する。さらに、熊野地方ならではの地域の教育資源を生かした特色ある取組に向けて、世界遺産センターや新宮ユネスコ協会なども含めたコンソーシアムとして構成している。今後は探究活動における生徒の課題設定や活動の進め方等について、様々な角度から指導、助言をいただく予定である。

## ⑧事業の説明・広報

- ・令和5年6月22日(木)第1回、令和5年9月7日(木)第2回(両校合同)  
令和5年10月23日(月)第3回、令和6年1月11日(木)第4回  
本校学校運営協議会にて、本事業の取組状況を説明し、協議した。
- ・令和5年8月2日(水)  
本校オープンスクールにて、中学生・保護者・教員に本事業の取組状況を説明した。
- ・令和5年9月～令和6年2月  
地元の各中学校での学校説明会で、リーフレットを活用しながら本事業の取組状況を説明した。
- ・令和5年10月  
地域の方々との協議会で、本事業の取組状況を説明した。
- ・令和6年2月1日(木)第1回(両校合同)、令和6年2月26日(月)第2回  
学校運営協議会委員による再編整備に関する協議にて、本事業の取組状況と新学科の設置に向けた検討を説明し、質疑応答した。
- ・令和5年4月～令和6年2月  
本事業の特色ある取組について、地方紙に資料提供し、記事掲載をしていただいた。

## ⑨成果普及のための取組

- ・探究学習の中間発表会を12月19日(火)に本校体育館で行った。今年度は、運営指導委員等の関係者のみならず、一般開放の形式で実施し、生徒の探究の成果を地域の方にも見ていただける機会を設けた。
- ・今年度は積極的に先進校を訪問したり、コーディネーター研修に教職員も参加したりすることで、他府県の高等学校と連携する機会を得た。今後は互いの取組の成果を共有するなど、連携を深めたい。
- ・「アジア・オセアニアフォーラム」等に積極的に参加し、本校での学びの成果を校外に向けて発表する機会とした。これらの機会に他校の生徒と交流する中で、学習の成果をアウトプットするだけでなく、他校の取組についても知り、さらなる気づきを得たり、より視野を広げたりするなど、学びを深めることに繋がった。
- ・学校通信をホームページに掲載し、「総合的な探究の時間」や「くまの学彩」の取組の内容を紹介した。
- ・学習や活動の内容をまとめた事業報告書を作成し、コンソーシアムを構成する関係機関や地域の中学校、他の高等学校等に配布する予定である。
- ・本校の特色ある取組について、地方紙に資料提供し、記事掲載をしていただいた。
- ・中学校での学校説明会において、本校の「総合的な探究の時間」や「くまの学彩」の学びを紹介した。

8. 目標設定シート

【実施計画書(普通科改革支援事業)別添2】

ふりがな	わかやまけんりつしんぐうこうとうがっこう
学校名	和歌山県立新宮高等学校

**新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）  
目標設定シート**

本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	目標値：年度：
<b>(成果目標)</b>						
校外の発表会や各種コンテストに自主的に参加し、自らの学習成果を校外に向けて発信した生徒の数						単位：人
a	本事業対象生徒：		0	12		30
	本事業対象生徒以外：		3	5	10	0
目標設定の考え方：自身の気づきや問いを掘り下げて課題を設定し、文理を問わずさまざまな情報を収集・分析・整理する力、多面的・包括的に物事を捉えた上で自分の考えを他者に発信する力を育成できたか。						
<b>(成果目標)</b>						
地域でのボランティア活動などの社会活動に自主的に参加した生徒の数						単位：人
b	本事業対象生徒：		25	80		100
	本事業対象生徒以外：		8	30	50	30
目標設定の考え方：多様な他者と多様な意見を交わしながら、人間・地域・社会が抱える課題の解決のため、実際に社会やコミュニティに主体的に参画しようとする姿勢をもつ生徒を育成できたか。						
<b>(成果目標)</b>						
進学を希望する生徒のうち、進学後の学びの目標を明確に持った上で高等教育機関への進学を希望する						単位：%
c	本事業対象生徒：		—	—		70
	本事業対象生徒以外：		30	30	40	55
目標設定の考え方：学際的な学びを通して研究の意義を理解し、自らの生き方や社会の在り方について主体的に考え、目標を明確化した上で学び続ける意思をもった生徒を育成できたか。						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
全校生徒数(人)	548	541	562	583	600
本事業対象生徒数			200	396	600
本事業対象外生徒数			362	187	0

## II 具体的な研究開発報告

# 1 教育課程

## (1) 令和4年度の検討内容・取組

令和4年度5月よりビジョン委員会を設置し、主に以下の2点(A)・(B)を踏まえた上で、学際的な学び・文理融合型の学びを実現するためには、どのような教育課程を編成することが望ましいかを検討してきた。さらに(A)に関して、教科横断的な取組や科目設定の端緒を探るため、ビジョン委員会が中心となって教科横断型授業の試行にも取り組んだ。

### (A) 学際的な学びを実現できるような教育課程

現状の教育課程においては2年次より文系・理系のコースに分かれてしまうため、選択科目において制約となる。実社会で様々な課題に接する中で必要となる教科・科目など、生徒の多様な学習ニーズに対応できるような仕組みを考える。

### (B) 幅広い進路希望に対応できる教育課程

本校生徒の進路希望は多岐にわたっている。また、令和4年度入学生より新教育課程が始まり、令和7年度より大学入学共通テストも大幅に変更されるため、今後の大学入試の動向も踏まえた科目設定が必要である。

## (2) 令和5年度の取組

### (A) 学際的な学びを実現できるような教育課程

令和5年度入学生より、これまでの2年次からの文系・理系のコース制を廃止して、生徒が学びたい科目を選択して一人一人が自分に合ったカリキュラムをデザインできるようにした(2年次は11単位、3年次は19単位の科目を選択)。ただし、これは大幅な変更となり、生徒や保護者の不安が大きくなることが予想されたため、今年度は、進路希望に応じて、科目選択のパターンを3つ提示して対応した。

具体的には、パターン1は「英語・国語・社会を重点的に学習し、就職や短期大学・各種専門学校への進学や私立大学文系学部への進学に対応」、パターン2は「英語・国語・社会を重点的に学習し、国公立大学・私立大学の文系学部への進学に対応(共通テスト受験を想定した学び)」、パターン3は「数学・理科を重点的に学習し、国公立大学・私立大学の理系学部への進学に対応(共通テスト受験を想定した学び)」、というように生徒が学びたい科目を選ぶことのできるようなデザインにしながらも、各自が想定する進路希望に応じて必要となる科目を選択できるように配慮した。

(B) 幅広い進路希望に対応できる教育課程について

1年次は必修科目を中心に配置し、2・3年次は学校設定科目も含めた選択群を設定している。令和4年度当初に考えていた教育課程から大きく変更した点は以下の3点である。

(ア) 2年次の数学について

2年次に全員が「数学B」を履修する形であったが、生徒間の学力差が大きいという現状を踏まえると1年次までの学び直しができるような科目を設定するという観点から、「基礎数学」の講座を開設することとした。

(イ) 2年次の選択科目「芸術Ⅱ」「情報Ⅱ」「化学総合」について

別の科目選択群で「化学」があり、現状も化学総合を選ぶ生徒が非常に少ないため学際的な学びの観点からも別の科目の設定について議論した。その中で、2年生は部活動の中心となる学年で、体育が2単位であることから、特に運動部の活動の充実のことも踏まえて、生徒の希望に応えられるような科目の設定として「体育探究」を設定するという結論に至った。

令和7年度の共通テストでは新たに「情報Ⅰ」の科目が設置されるが、急速に進展する情報社会で活躍できる力をつけるためには、1年次の2単位だけでなく2年次にも「情報Ⅰ」の内容を踏まえた探究や演習ができるような科目が必要であるとして、学校設定科目の「情報活用」を設けるという結論に至った。今後、「情報Ⅱ」を設けることについても検討を進めている。

(ウ) 3年次の選択科目「公民探究」「倫理」「政経」について

令和7年度の共通テストの公民科目においては、「公共+政経」もしくは「公共+倫理」のセットでの受験となるため、2年次に公共、3年次に政経か倫理どちらかを必ず学習できるような形に変更した。

(3) 令和5年度の課題・令和6年度に向けて

学際的な学び・文理融合型の学びを実現するため、文系・理系コース制を廃止したり、科目選択の幅を広げたりするなど、令和5年度入学生よりこれまでの教育課程に大きな変更を加えた。しかし、自身の進路希望に沿った科目を生徒が選べるよう、科目選択のパターンを設けたため、生徒が自分自身で科目を選択し、カリキュラムをデザインするという当初の想定は不完全な形となってしまった。今後は文系・理系コース制を廃止したことの是非、より生徒が主体的にカリキュラムをデザインできるような仕組みづくり、生徒が自ら進路実現に向けて必要な科目を選択していけるような進路指導など、学際的な学び・文理融合型の学びと幅広い進路希望への対応をともに叶えられる教育課程の実現について、さらなる検討を続けたい。

また、学校設定科目「くまの学彩」を設定したことによって単位数を減らした科目（英語コミュニケーションⅡ）への影響が令和6年度より顕れると考えられる。その点についても注視して必要であれば改善する予定である。

## 2 「総合的な探究の時間」

### (1) 概要

原則毎週金曜7限に実施し、担任が担当する。探究活動を体験させることで、その手法や技術の上達を図ることを基盤としながら、学習指導要領に示された目標を達成できるように、実施していくものとする。

1年次には、探究活動の基本的なスキルの習得を主たる目標とし、探究活動の概要の説明後、こちらから設定したテーマや課題に対して自ら問いをたて、短期的なサイクルで複数回探究活動を体験させ、理解と上達を図る。

2年次は、1年間をかけて一つのテーマや課題について探究活動を実施する。中間発表の機会を設けて、課題の修正やアドバイスを行いながら2学期後半にポスター発表会を開催する。発表会には1年生も視聴・評価する立場として参加させる。その後、発表内容を論文にまとめさせる。

3年次には、2年次に実施した探究活動の内容をもとに、これまでの探究活動の成果をふり返ってまとめ、進路探究を通じて自己の在り方・生き方について考えさせる。

### (2) 令和4年度の検討内容・取組

令和4年度は、各学年とも本校の従来の指導計画に基づいて「総合的な探究の時間」を実施し、本校の課題や改善が必要な点を検証した。主な課題・要改善点は以下の通りである。

- ①正担任1人が各クラス(約40人)を担当するため、きめ細やかな指導が困難である。
- ②生徒の興味・関心に基づいたテーマがなかなか見つからない。
- ③探究の基礎・探究のサイクルを意識した活動になっていない。  
(単なる調べ学習で終わってしまう生徒が多い。)
- ④情報収集がインターネットの情報検索に終始してしまっている。
- ⑤生徒にとって、ポスター発表が活動のゴールになってしまっている。
- ⑥「総合的な探究の時間」の評価をどうするか。

また、令和4年度には、令和5年度より実施の学校設定教科・科目「くまの学彩」の試行的な取組を「総合的な探究の時間」で行った。試行的な取組については、以下の通りである。

#### ・「国連セミナー」 令和4年7月8日

元国連WFPアジア地域局長の忍足謙朗氏を招き、事前学習では同氏の活動ビデオを各クラスで視聴、当日は体育館で全体講演後に別室で有志による交流会を設定した。生徒たちには非常に好評で、交流会にも多数の生徒が出席した。講演会の内容だけでなく、事前学習の大切さを実感できた。



- ・「SDGsカードゲーム」 令和4年7月15日  
「SDGs de 地方創生」公認ファシリテーターの本校卒業生に依頼。他の4名のファシリテーターの方々とともに1学年で実施。SDGsや地方創生の紹介とともにカードゲームを展開した。生徒たちの反応も良く、楽しく学べるという意味で非常に有意義な時間であった。
- ・「SDGs & 地方創生あわじ・とくしま体験学習」 令和4年8月21日・22日  
課外での体験学習として夏休みに実施。1、2学年を対象に、7月に希望者を募り、抽選で参加者30名を決定し、28名(2名がコロナ関連で不参加)が参加した。バス1台での移動で、感染症対策を意識しながらの実施となったが、初日は淡路島のタネノチカラ「Seedbed」にて、SDGs研修プログラムを受講。「土」を中心に開墾体験なども経験した。2日目は、徳島県神山町で先進のIT企業誘致等による町おこしの様子を視察した。今回も事前学習を2日間実施、SDGsのビデオ視聴と神山町の様々な取り組みについて事前にレクチャーし、現地での質問事項等をする等の準備をさせた。現地での研修内容の記録や事後の感想を書かせる指導も行ったが、生徒たちは非常に意欲的で実施の意義は十分あったと考えられる。今後もこのような外部での研修や視察を積極的に企画し、生徒たちの活動範囲や視野を広げたい。

### (3) 令和5年度の取組

令和5年度は、令和4年度に挙げられた課題や改善を踏まえて1学年から3学年までの指導計画をたて、キャリア研究部長の統轄のもと、各学年に配置されたキャリア研究部員が「総合的な探究の時間」の担当となり、課題の解決に向けてのアプローチを行った。

また、従来は各学年の「総合的な探究の時間」が学年の裁量に任されていた点が多く、学校組織として「総合的な探究の時間」を計画・実施できていなかったため、原則毎月曜日にキャリア研究部会を定例で実施し、各学年の「総合的な探究の時間」の進捗状況の確認や情報共有を行った。

前年度に挙げられた課題・改善点に対する今年度の取組と未だ残る課題については、以下の通りである。

①正担任1人が各クラス(約40人)を担当するため、きめ細やかな指導が困難である。

⇒ 令和5年度も、各学年の正担任が「総合的な探究の時間」を担当した。課題の解決に向けて、副担任・キャリア研究部・コーディネーターが連携し、各クラスの授業を支援した。従来は各クラスの正担任の裁量・負担が非常に大きかったため、一定の効果はあったと考えられるが、正担任1人で1クラス約40人(およそ10グループ)ほどの探究学習に伴走することは難しいという意見があがっており、学校全体で生徒の探究学習をサポートする体制を構築することが必要である。

令和6年度は、正担任1人で担当するのではなく、副担任や学年団、キャリア研究部、コーディネーターが一丸となる体制づくりを図りたい。

②生徒の興味・関心に基づいたテーマがなかなか見つからない。

⇒ 本校はこれまで、1年次に探究学習の練習をする際には「地域」、2年次の課題探究では「日本」「国際社会」など、課題設定の枠組みを設定した上で、生徒が自ら探究する課題やテーマを定めてきた。その際、その課題やテーマ、リサーチクエストがあまりにも卑近なものであったり、「総合的な探究の時間」で取り扱うにはスケールが大きすぎるものであるなどして、探究の体裁が整っていないグループが多く存在していた。しかし、「総合的な探究の時間」で課題探究を行う際には、生徒が自ら興味・関心のある課題・テーマを発見し、その解決を図ることが肝要であるため、教員側が課題を設定したり、生徒の身の丈に合った（とこちらが考える）テーマに誘導するのではなく、「生徒の興味・関心を刺激し、その幅を広げられないか」という観点でアプローチを試みた。それが令和5年度入学生より実施の学校設定教科・科目「くまの学彩」である。詳細は後述するが、1学年は「総合的な探究の時間」で探究の基礎を学び、「くまの学彩」で様々なジャンルの講演・体験学習などを行って生徒の興味・関心の幅を広げ、その2つが両輪となって2年次の課題探究につながるようにデザインした。このアプローチに効果があったかは現1年生が課題探究を行う令和6年度に改めて検証したい。

③探究の基礎・探究のサイクルを意識した活動になっていない。

（単なる調べ学習で終わってしまう生徒が多い。）

⇒ 1年次に探究の基礎を学ぶ際、課題の設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現という探究の流れと、それを発展的に繰り返す探究のサイクルについての理解を深めることを意識して指導した。さらに、1年生が探究の基礎を学んだ後、2学期より探究学習の練習（模擬探究）を行うにあたり、前年度まではクラス内発表に留まっていたものを、クラス内発表の質疑応答で見つかった改善点・教員からのフィードバックを取り入れて再び探究を行う活動に変更して実施した。その上で、学年末にクラスをまたいだ学年内発表を行った。これにより、単に一度まとめたものを発表するのが探究ではなく、そこから再び発展的に活動を継続するというサイクルを理解することができたと思われる。

また、発表の際に課題・テーマ・問い・仮説・研究手法などを明示するように形式を揃えさせ、またその意味についても理解できるよう心懸けて指導したことで、発表資料の体裁を統一させることもできた。

2年生についても同様に、年度当初に探究の基礎・探究のサイクルについて1年次に学んだことをふり返り、それを意識して年間を通じて課題探究を行った。

④情報収集がインターネットの情報検索に終始してしまっている。

⇒ 生徒が探究活動を行う際に、その全ての段階で情報収集がインターネットの情報検索に終始してしまっていることも、本校の「総合的な探究の時間」の問題点の一つである。「総合的な探究の時間」が単なる調べ学習で終わってしまう生徒が多いのはこのことも大きな要因であると考えられる。また、以前は図書館で文献を探したり、実際に街に出てインタビューを行う生徒も一定数は見られたが、1人1台端末の実現により、この傾向は以前より強まっている。

そこで、令和5年度は、コンソーシアムや地域の機関・専門家と連携してインターネットの情報だけではなく、生きた情報を集められる工夫をするとともに、インター

ネットで情報収集をすることを前提として、どうすればより根拠のある資料を生徒が見つけれられるのかという観点からも課題の解決を試みた。

1学年では「くまの学彩」において、和歌山県庁企画総務課データ利活用推進班に講演を依頼し、探究学習におけるデータ利活用の意義やインターネットで情報を収集する際の注意点、高校生でもアクセスできる官公庁等のデータなどについてレクチャーしていただいた。大変分かり易く、実用的な内容であったため、令和6年度以降も各学年の「総合的な探究の時間」で講演を依頼したい。

また、図書館司書より、過去に作成された探究活動の記録を検索できるように、レファレンス協同データベース(研修版)についての提案を受けた。このデータベースは、国立国会図書館が無料で提供している、全国の図書館に寄せられた調べ方についてのオンライン上の検索ツールで、参考文献や引用サイトなどを生徒に随時記録させることで、情報カードとしても活用できるものである。研修版であれば、自校のみの公開で運用する事が可能だが、システムの見やすさの面から課題があると判断し、今年度の採用は見送った。今年度は、2学年の中間発表でまとめたポスターと個人レポートについては、図書館にて常時閲覧できるように保管することとした(4年前より継続中)。各グループごとに仕分け、ポスターについては、画像化を行ったうえで、図書館のオンライン蔵書検索システムにテーマからの検索を可能にする予定である。今後はこのことについて生徒への周知を徹底し、先輩の探究の成果を後輩が継承する流れを作りあげたい。

#### ⑤生徒にとって、ポスター発表が活動のゴールになってしまっている。

⇒ 2年次は、年度当初に各クラスごとにグループをつくり、課題・テーマを設定した上で年間を通じて課題探究を行う。その際、毎年2学期の後半に、中間発表の位置づけで、体育館でポスター発表会(成果発表)を実施している。これはあくまで中間発表であり、質疑応答の時間に回答できなかった質問や見学者・教員からのフィードバックを受けて、発表後の探究につながるものであるが、生徒にとってポスター発表が活動のゴールになってしまっているということが、本校の課題の一つである。

1学年については上述の通り探究の基礎を学ぶ際に探究のサイクルについて理解させ、さらに中間発表の目的や意義についても指導した。

また、この課題は、生徒に伴走する教員の意識・関わり方にも影響を受けるものであるため、2学年については、学年の「総合的な探究の時間」担当者を中心として、生徒だけではなく、教員間でも、ポスター発表会はあくまで中間発表であることを徹底して意識づけした。

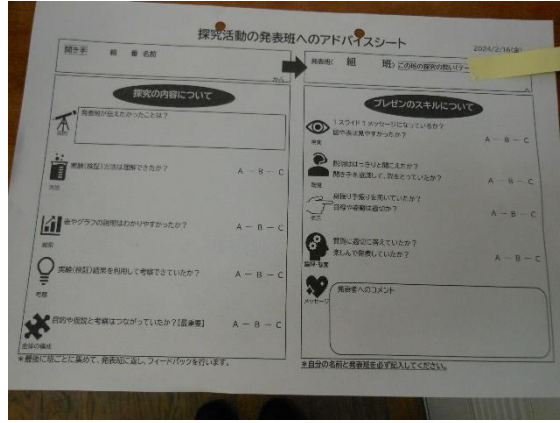
#### ⑥「総合的な探究の時間」の評価をどうするか。

⇒ 「総合的な探究の時間」、学校設定教科・科目「くまの学彩」、各教科科目の探究学習における生徒の学びをどのようにして評価するか、その評価方法の開発も、本校の課題である。令和5年度は、ルーブリック評価の開発等、キャリア研究部と教務部とで評価についても検討したが、未だ本校独自の評価方法の開発には至っていない。

令和6年度は、探究を通して生徒に身に付けさせたい資質・能力等をもとにして、先進校視察や先行事例の研究を通して、本校に合った評価方法を開発したい。

#### (4) 令和6年度に向けての検討事項・課題

- 【1学年】 「総合的な探究の時間」の在り方を再考する。1年次は、2年次の課題探究に向けてスキル学習等を中心に構成するか、探究に親しみを持てるような活動を主に行うべきか、それとも2年間かけて課題探究を行うような計画をたてるべきか等、1年次の「総合的な探究の時間」の位置づけについて、改めて検討する。
- 【2学年】 「総合的な探究の時間」の柱となる2学年の課題探究を、どのようにして充実させていくか。現在は毎週金曜日7限の45分間のみの探究活動になっているため、どのようにして時間を確保するか。上述のように、教員による生徒のサポート体制をいかに再構築するか。生徒が本当に興味・関心のあるテーマで課題探究ができるように、どのようにしてグルーピングをするか。新学科設置に向け、本校の「総合的な探究の時間」をどれほど充実・深化させられるか検討する。
- 【3学年】 3学年の「総合的な探究の時間」の在り方についても引き続き検討する。1・2年次の探究の成果を個人でふり返りまとめる活動を行っているが、今後はそれを地域に還元したり、下級生に継承するような活動を取り入れたい。また、進路探究が単なる進路指導にならないよう、令和6年度に向けて指導計画を作成する。



### 3 学校設定教科・科目「くまの学彩」

#### (1) 令和4年度の検討内容

- ・毎週金曜日6限に実施し、副担任が担当する。SDGsや「くまの」地方に関連するテーマのもと、教科書では学べない事柄について、外部講師の講演や体験学習などを行い、2年次の課題探究や3年次の「くまのプランニング」の材料となるよう幅広い知識を身につける（知識のインプット）ことを目的とする。
- ・事前学習、講演や体験学習、振り返りを1セットして、年間10回程度を予定する。内容はコンソーシアムの方々等と協力しながら、3年間を見通して年間計画を作成するものとする。
- ・今後の持続性を考慮して、従来から各分掌で主催していた外部講師の講演などを整理して「くまの学彩」の取り組みに再構成することや、外部講師に頼らず教員で独自教材を開発して実施することも含めて学習内容を構成したい。

#### (2) 令和5年度の取組

##### (A) 令和4年度の検討内容からの変更点

事前学習・講演や体験学習・振り返りの3時限を1セットとして、1年間で10セット程度実施するという計画だったが、外部講師との日程調整上の都合で、講演や体験学習を1時限で完結するものとし、毎週異なるテーマを学習するものに変更した。1つ1つのテーマを深掘りして学ぶというよりは、2年次の課題探究に向け、1つでも多くの社会的な諸課題の入り口を生徒に見せることにより、興味・関心の幅を広げられるような設計にした。ただし、内容によっては事前学習を実施することもあった。

取り扱うテーマに関しても、2年次の課題探究を見越して、SDGsや「くまの」地方に限定せず、「地域」「国内」「国外」「共通」というカテゴリーと「歴史」「観光」「医療」「金融」「スポーツ」などといったジャンルを組み合わせることで、生徒が様々な課題に触れられるようにデザインした。

##### (B) 「くまの学彩」(1学年)の学習の流れ

毎週金曜日6限に実施し、副担任が担当した。原則、外部講師による対面の講演会やオンライン研修、体験学習を、体育館・各HR教室・校外で実施。生徒は毎回振り返りシートにメモをとり、感想や疑問点の記述に留まらず、授業後には今回のテーマで次年度探究をすとしたらどのような問いがたてられるか？までを記入することとした。振り返りシートは正担任が内容を確認した後に「くまの学彩」ファイルに保管し、学年末に一斉に1年間の内容を振り返るようにした。



(C) 「くまの学彩」(1学年)のねらい

1年次の「くまの学彩」は、前述の通り、「地域」「国内」「国外」「共通」というカテゴリと、「歴史」「観光」「医療」「金融」「スポーツ」といった様々なジャンルを組み合わせた講演・体験学習等を毎週異なるテーマで実施し、生徒の興味・関心の幅を広げることをねらいとした。そうすることで、2年次の課題探究をする際に、興味・関心に応じて自ら課題設定をすることができる生徒を育てたいと考えている。

1年次の「総合的な探究の時間」では2年次の課題探究に向けて探究の基礎を身に付けるため、1年次の「くまの学彩」と「総合的な探究の時間」とが両輪となって、生徒の課題発見力や課題解決力を育めるようにカリキュラムデザインを行った。

(D) 「くまの学彩」(1学年)の具体的な取組

【1学期】

- |   |       |         |  |
|---|-------|---------|--|
| ① | 5月26日 | 地域×観光   | 新宮市の観光について<br>(新宮市役所商工観光課)                               |
| ② | 6月9日  | 地域×環境   | ジオパークについて<br>(南紀熊野ジオパークセンター)                             |
| ③ | 6月16日 | 国外×食糧問題 | 国連セミナー【事前学習】   |
| ④ | 6月23日 | 国内×人権   | 人権問題について<br>(新宮市役所人権政策課)                                 |
| ⑤ | 7月7日  | 国外×食糧問題 | 国連セミナー<br>(忍足謙朗氏/元国連WFPアジア地域局長)                          |
| ⑥ | 7月14日 | 共通×SDGs | SDGs de 地方創生カードゲーム<br>(SDGs de 地方創生カードゲーム<br>公認ファシリテーター) |

【2学期】

- |   |        |         |   |
|---|--------|---------|---|
| ⑦ | 9月1日   | 共通×探究   | データの見方・考え方<br>(和歌山県庁企画総務課データ利活用推進班)                     |
| ⑧ | 9月8日   | 国内×スポーツ | ハイパフォーマンススポーツについて<br>(久木留毅氏/国立スポーツ科学センター)               |
| ⑨ | 9月15日  | 地域×医療   | 和歌山県と新宮市の健康<br>(東京医療保健大学和歌山看護学部)                        |
| ⑩ | 9月29日  | 地域×歴史   | くまの曼荼羅絵解きプレ発表<br>(本校生徒発表/曼荼羅クラブ)                        |
| ⑪ | 10月13日 | 地域×観光   | 世界の旅人を魅了する熊野の魅力とは<br>(山西毅治氏/和歌山県社会福祉財団、<br>元世界遺産センター所長) |
| ⑫ | 10月20日 | 地域×環境   | 高速道路開発とヤマネ保護【事前学習】                                      |



- ⑬ 10月27日 国内×司法 検察庁の役割とは？裁判員裁判とは？  
(和歌山地方検察庁)
- ⑭ 11月 1日 国内×人権 人権鑑賞会  
(ちゃんへん、氏)
- ⑮ 11月10日 地域×防災 防災スクール  
(新宮市消防本部、自衛隊)
- ⑯ 11月15日 地域×環境 高速道路開発とヤマネ保護  
(湊秋作氏、国土交通省、二村直司氏他)
- ⑰ 12月 8日 地域×防災 J R 講演  
(J R西日本)
- ⑱ 12月15日 国外×平和 ユネスコ講演会  
(中谷剛氏／新宮ユネスコ協会会長)

### 【3学期】

- ⑲ 1月12日 国内×租税 租税制度について  
(和歌山税務署)
- ⑳ 1月19日 地域×歴史 画像でたどる新宮・熊野の近代史  
(中瀬古友夫氏)
- ㉑ 1月26日 国外×金融 身近にある「金融・国際金融」の話をしましょう  
(鈴木和巳氏)
- ㉒ 2月 2日 地域×歴史 熊野古道の歴史と歩く意義  
(本校教職員／元世界遺産センター職員)

### (3) 令和6年度に向けての検討事項・課題

今年度は「地域」「国内」「国外」「共通」というカテゴリー分けをしたが、それぞれの実施回数に偏りができてしまった。同様にジャンルもより幅広いものにするべきであり、令和6年度は全体のバランスを調整しながら計画を組みたい。今年度は初年度ということもあり、毎週講演を設定したが、次年度はより計画的に段取りをして、必要に応じて事前学習・事後学習の機会を設け、生徒の学びを意義あるものとしたい。また、振り返りシートについても、今年度使用したものを、次年度はより良いものにしたい。

令和6年度には2学年でも「くまの学彩」が始まり、2学年では「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」とで充実した課題探究を实践できるように計画したいと考えている。そのため、1学年の「くまの学彩」も、次年度はより2年次の課題探究を意識したテーマで、講演・体験学習を設定したい。



## 4 授業研究（探究を取り入れた授業、ICTの活用）

### （1）令和4年度の取組

令和4年度は、教科横断型授業をテーマに、教科の異なる教員を3～4人ずつの10グループに分け、1グループにつき1つの授業案を考え実践してもらおうという形をとった。授業内容についても、教科横断型授業として新たな教材を探してもらおうのではなく、1年間の学習の中で、他教科の教員の視点が入ることでより授業内容が充実するようなものを各グループで検討してもらった。実際に研究授業を実践した教科・科目は以下の通りである。

- ・日本史×化学 「科学的な視点から歴史を考察する」
- ・情報×社会×理科 「地球温暖化について、様々な観点から考える」
- ・英語×地学 「Eco-Tour on Yakushima」
- ・古典×美術 「古代の色・かさねの色目」
- ・英語×音楽 「新宮高校の校歌の英語バージョンをつくろう」
- ・数学×体育 「自分に最適なペースで持久走をするためには」
- ・物理×体育 「どうすればボールをより飛ばせるか物理的根拠をもって解析する」

### （2）令和5年度の取組

令和5年度は、前年度の教科横断型授業に引き続き、①探究的な学びを取り入れた授業、②生徒1人1台端末を活用した授業の2つのテーマから任意に1つ選んでもらい、各教科で研究授業に取り組んでもらった。研究授業は教務部が企画・統轄を行ったが、キャリア研究部と連携し、「総合的な探究の時間」における探究と各教科・科目における探究の違いなど、取組の意図や目標を教員に示した。授業研究を通して、学校全体で新学科の特色や授業の在り方を考えるきっかけとなるような働きかけを心がけた。

### 【 化学基礎 学習指導案 】

授業日時	令和5年10月26日（木）5限		
授業場所	1年4組教室	授業クラス	1年4組 41名
科目名	化学基礎		
本時の指導内容	第2章 物質の変化 第1節 物質と化学反応式		
本時の題材	物質の概念を学ぶ。物質と粒子の数、質量、気体の体積の相互の関係について学ぶ。		
本時の目標	物質と粒子の数、質量、気体の体積を相互に変換できるようにする。		

本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援	評価基準および評価の方法
導入 (5分)	物質について復習を行う。 ・ 1 mol に含まれる原子 (分子) の個数、体積、質量について確認する。	・ 覚えていない生徒に対して、前回までのプリントを確認させることで、自分の力で取り組むことができるようにする。	
展開 (35分)	モルカードゲーム 5人一組のグループでカードゲームを行う。  小テスト 物質の変換に関する問題を小テストとして行う。(物質を介さないと解けない問題の正答率も上がる)	・ 同じ物質のカードを多く含ませておくことで物質の変換の機会を増やす。 ・ 生徒同士で出されたカードが合っているのか確認するよう促すことで、物質の変換の仕方を考えられるようにする。  ・ 小テスト後、すぐに答え合わせすることで自分の間違いを振り返ることができるようにする。	カードゲームの中で物質の変換を行うことができる (グループワーク) 【知】  物質と粒子の数等の変換を適切に行っている (小テスト) 【知】
まとめ (5分)	振り返り 物質を介して相互に変換することが必要である。	ワークシートに本時の振り返りを記入させ、物質の変換について確認させる。	

【 情報 I 学習指導案 】

授業日時	令和5年10月26日(木) 4限		
授業場所	1年5組教室	授業クラス	1年5組 42名
科目名	情報 I		
本時の指導内容	画像のデジタル表現		
本時の題材	アナログ画像をデジタル画像として表現する		
本時の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ アナログ画像をデジタル画像として表現する方法を思考することができる。</li> <li>・ 実習を通じて、情報社会に主体的に参画する態度を養おうとしている。</li> </ul>		

本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援	評価基準および評価の方法
導入 (7分)	1. 掲示された1枚の絵を見て、その絵について知っていることを発言する。 2. 本時の学習のねらいを理解する。	・発言させる生徒を指定し、授業ごとに違う人が発言できるようにする。 ・本時のねらいや授業の進め方を説明する。	
展開 (30分)	3. デジタル化の手順(標本化、量子化、符号化)について理解する。  4. 表計算ソフトを用いて、コンピュータ上でデジタル画像を表現する疑似体験をする。 ・イラストを見ながら、表計算ソフトでデジタル化した状態を表現していく。 ・生徒同士で、工夫した部分を協議および共有する。	・標本化や量子化、符号化については、図や画像などを用いて視覚的に説明する。	デジタル化する上で、元のアナログ画像に近い表現をするためにはどうすればよいかを思考できている。  デジタル画像の表現方法を探究し、試行錯誤を行うなど、デジタル化に関心を持っている。
まとめ (8分)	5. デジタル的な表現をしている場面を確認し、デジタル化に興味を持つ。  6. 次時の授業内容を確認する。	・デジタル的な表現をしている場面(ゲーム画面やアート作品)を紹介し、生徒の興味をひく。  ・画像のデジタル化について、次時の授業内容(デジタル量の計算)を示す。	

【 コミュニケーション英語Ⅲ 学習指導案 】

授業日時	令和5年11月17日(金) 1限		
授業場所	3年3組教室	授業クラス	3年3組 35名
科目名	コミュニケーションⅢ		
本時の指導内容	教科書 CrownⅢ Lesson 7 Being Bilingual		
本時の題材	複数言語併用の現実や言語の統制・抑圧の事例などを通し、自分自身及び他者の母語の大切さを知る。		

<p>本時の目標</p> <p>母語をめぐって血が流された歴史を知り、それがアイデンティティーに関わる問題だと理解させる。</p>
---

本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援	評価基準および評価の方法
導入 (7分)	□本レッスンに関する新出語句を学習する。 (ペア活動)	○CDで新出語句を学習した後、ペアで練習して習得させる。	・積極的な参加態度 ・授業観察  ・ワードリスト
展開 (30分)	□本文導入 3つの Question を通して本文の内容を理解させる。  Q1. 世界各地で言語使用に関するデモや暴動が起きる原因を考えさせ、読み取らせる。  Q2. ユネスコが国際母語デーを制定した理由を読み取らせる。  Q3. 国際母語デーとヨーロッパ言語の日に共通する目標を読み取らせる。	○グループ活動で本文を読む前に Question の答えを予想させる。  ○グループで考えた答えを答えさせる。  ○本文の読み取りをさせる。  ○机間巡視をしながら、適宜アドバイス、説明を行う。	・積極的な参加態度 ・授業観察  ・ワークシートまたはパワーポイント
まとめ (8分)	□T/F問題を通して本時の振り返りをする。	○本文内容が理解できているか確認する。	・授業観察

【 公民探究 学習指導案 】

授業日時	令和5年11月17日(金) 3限		
授業場所	3年2組教室	授業クラス	3年2組 40名
科目名	公民探究		
本時の指導内容	現代の経済と国民福祉		
本時の題材	中央銀行の役割と金融の自由化		

<p>本時の目標 好況時と不況時の金融政策の目標と、預金準備率操作について理解する。</p>
--

本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援	評価基準 および 評価の方法
導入 (5分)	本時の目標と、ルーブリックによる到達目標を確認する。	学習に見通しを持たせるため、到達目標を全体で確認させる。	
展開 (30分)	<p>●前時の復習 中央銀行（日本銀行）の3つの役割を確認する。</p> <p>●活動Ⅰ 日本銀行の金融政策を見て、自身が現時点でわからない単語を書き出す。</p> <p>●活動Ⅱ 本時のワードである「預金準備（率）」について、その意味を予想し、記入する。</p> <p>●活動Ⅲ 市中銀行を媒介して、預金者と借入者との間で資金がどのように動いているかを確認する。</p> <p>●活動Ⅳ 活動Ⅲの資金の動きについて、このままではどのようなことが起きるかを考え、文章におこす（Teams の自分の欄に書き込む。）</p> <p>※「預金準備率」とは何かをまとめる。</p> <p>※金融政策の大原則（目標）について、好況時と不況時に分けてまとめる。</p>	<p>本時の学習内容とどのようにつながるかに注目するよう促す。</p> <p>わからない単語が自身の「学習課題」であると捉え、一つずつクリアしていくことを意識づける。</p> <p>いわゆる「仮説」である。この「仮説」と実際の意味の異同がどのようなかを注目させる。</p> <p>ここで、「金利」について触れ、銀行から借り入れを行うときや、銀行に預金するときの利点についても考えさせる。（＝実生活とのつながり）</p> <p>金額に着目させる。活動Ⅳは、「預金準備（率）」の意味に迫る学習活動であるため、Teams に書き込ませた後、全体で各個人の意見を共有する。</p> <p>正しい理解が必須であるため、理解に至っていない生徒がいないかに留意する。</p> <p>好況時・不況時の経済社会がどのようになっているのかを想像させることでイメージしやすくする。</p>	

	<p>●活動Ⅴこれまでの学習活動を踏まえて、好況時と不況時において預金準備率を上げたらよいか、下げたらよいかを考える（Teamsの自分の欄に書き込む）。</p> <p>※預金準備率が上がったときの市中銀行の貸し出しの動きや、借入者側の心理について考える。</p>	<p>金融政策の大原則（目標）を再確認させ、それを達成するために預金準備率をどのように操作すべきかの視点を示す。本時の全体目標の到達を確認する学習活動であるため、Teamsに書き込ませた後、全体で各個人の意見を共有する（＝市中銀行と日本銀行との関係）。</p> <p>（＝実生活とのつながり）</p>	
<p>まとめ （10分）</p>	<p>本時のまとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ポイントに沿ってまとめる。</li> <li>・本時の授業で理解できた用語を×で消す。</li> <li>・ループリックで到達度評価をする。</li> </ul>	<p>ループリックでの評価の仕方を再度説明する。今日×をつけられなかった用語は次時以降の課題として意識づける（＝次時の学びへのつながり）。</p>	

【 保健 学習指導案 】

授業日時	令和5年11月20日（金）3限		
授業場所	2年5組教室	授業クラス	2年5組 41名
科目名	保健		
本時の指導内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9つの単元を4～5人のグループに分けその単元について探究活動を行う</li> <li>・その単元の内容をPPでまとめる（2時間）</li> <li>・中間発表として発表する（2時間）</li> <li>・まとめた単元の中から、注目した点を見つけ出し、さらに+αの情報として探究活動を行う（2時間）</li> <li>・最終発表を行う（3時間）【本時】</li> </ul>		
本時の題材			
本時の目標	<p>注目した点についてどのような気づきがあったのか、またどのような視点から注目したのか等、探究活動が深められているか。</p>		



本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援	評価基準 および 評価の方法
導入 (5分)	○タブレットを使える状態にし、ミーティングを開始する	○発表する班の確認をする	
展開 (30分)	○スライドを共有する ○発表① ・約7分 ・発表者以外はWSを記入する ・各班から質問 ○発表② ※繰り返し ○発表③ ※繰り返し	○共有できているか確認する ○発表の雰囲気を出すためマイクを用意する ○必要であれば質問に対しての助言を行う	【知識・技能】 【思考・判断・表現】 【主体的】
まとめ (10分)	○WSをまとめる ○発表した班は自身の発表についても考察する	○最終発表となるため総括する ○3学期の発表の仕方を考える	【知識・技能】 【思考・判断・表現】 【主体的】

【 数学 I 学習指導案 】

授業日時	令和5年11月21日(火) 6限		
授業場所	1年4組教室	授業クラス	1年4組 41名
科目名	数学 I		
本時の指導内容	図形と計量		
本時の題材	三角形の面積公式		
本時の目標 ①新しい三角形の面積公式を導き出すことができる。 ②未知の課題に取り組むことで、粘り強く取り組む姿勢や、数学において理解を深めることの重要性を知ることができる。			

本時の展開

段階 (分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援 評価基準および評価の方法
導入 (15分)	【これまでの学習内容の復習】 どのような条件が与えられていれば、三角形の面積が求められるかを考えさせる。	思考力・判断力・表現力 面積公式の図形的な意味を理解できている。

	<p><b>【問題を解く①】</b> 2辺とその間の角、3辺が与えられている場合の三角形の面積を求める問題に取り組む。まず自分自身で問題を解決させ、その後グループの中でお互いの回答を確認し、情報を共有する。</p> <p><b>【本日の学習内容の説明】</b> 三角形の合同条件の確認をし、どのような条件があれば三角形の形が定まるかを説明する。</p>	<p>知識・技能 三角形の面積を求められる。</p> <p>机間巡視を行い、進んでいないグループがいれば、ヒントを与える。すでに終わっているグループがいれば、次の問題に取りかかるように指示する。</p>
<p>展開 (25分)</p>	<p><b>【問題を解く②】</b> 1辺とその両端の角が与えられているときの三角形の面積を求める問題に取り組む。</p> <p>グループでお互いに質問したり、説明したりしながら協力して問題に取り組む。</p> <p><b>【問題を解く③】</b> 1辺とその両端の角が与えられている場合の面積公式を求める。</p> <p>グループでお互いに質問したり、説明したりしながら協力して問題に取り組む。</p>	<p>主体的に学習に取り組む態度 三角形の1辺と両端の角が与えられていれば、面積が求まることに興味を持ち、課題に意欲的に取り組もうとしている。</p> <p>机間巡視を継続し行い、進んでいないグループがいれば、適宜ヒントを与える。終わったグループがいれば、次の、問題に取りかかるように指示する。</p> <p>思考力・判断力・表現力 問題②を参考に、一般化された文字だけの証明問題を説明することができる。</p> <p>主体的に学習に取り組む態度 具体的な問題解決の過程を振り返り、考えを深めようとしている。また、粘り強く問題解決に取り組んでいる。</p>
<p>まとめ (5分)</p>	<p>振り返りカードの記入 最初に掲示した目標が達成できたかどうかを振り返る。</p>	

【 化学基礎 学習指導案 】

授業日時	令和6年2月13日(火) 2限		
授業場所	1年5組教室	授業クラス	1年5組 42名
科目名	化学基礎		
本時の指導内容	酸と塩基		
本時の題材	塩の水溶液の性質		
本時の目標	塩の化学式から、塩の水溶液の性質を判断できるようになる。		

本時の展開

段階(分)	学習内容 生徒の活動	指導者の活動・支援 評価基準および評価の方法
導入 (5分)	<p>めあて：酢酸ナトリウム水溶液、硝酸銀水溶液の性質を推理できるようになる。</p> <p>本日の活動を確認する。</p> <p>BTB 溶液の色の変化を確認する。</p>	<p>試薬や器具をあらかじめ机上に用意しておく。</p> <p>BTB 溶液の色の写真を見せる。</p>
展開 (35分)	<p>①塩化ナトリウム水溶液、炭酸ナトリウム水溶液、塩化アンモニウム水溶液の性質を調べる(10分)</p> <p>②グループで塩の水溶液の性質のルールを考え、酢酸ナトリウム水溶液、硝酸銀水溶液の性質を予想する。(10分)</p> <p>③酢酸ナトリウム水溶液、硝酸銀水溶液の性質を BTB 溶液で調べる。(5分)</p> <p>④他の塩について、化学式から性質を考える。(10分)</p>	<p>各水溶液について、BTB 溶液を用いて調べさせる。 試験管には試薬のみ入れておく。</p> <p>グループで議論させる。 MetaMoji Classroom を活用し、予想を記述させる。 →MetaMoji Classroom の機能を活用し、全体に発表する。</p> <p>予想が間違っていた場合は再度予想させる。</p>
まとめ (5分)	塩の水溶液の性質を再度確認する。	法則を理解するとともに、論理的に考えることの重要性を伝える。

### III 運営指導委員会報告

## 1. 和歌山県立新宮高等学校 第1回運営指導委員会（1）

日時 : 令和5年6月21日（水） 12:30～13:30  
場所 : 新宮高校 コミュニティルーム等・オンライン  
出席者 : 運営指導委員  
          コーディネーター  
          新宮高校教職員

### 概要

- (1) 校長挨拶
- (2) 運営指導委員の紹介  
    コーディネーター・新宮高校教職員の紹介
- (3) 「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の取組状況について
  - ①カリキュラム開発
  - ②教科横断型授業・授業改革
  - ③総合的な探究の時間
  - ④学校設定科目「くまの学彩」
  - ⑤その他の取組
    - ・大学訪問
    - ・教職員による先進校視察
    - ・自主的な探究活動の推進
    - ・事業に関するアンケートの作成と実施（生徒・教職員対象）
    - ・広報活動
- (4) 取組における課題について
  - ①カリキュラム開発・教科横断型授業・授業改革
  - ②学校設定科目「くまの学彩」や総合的な探究の時間の評価方法の研究
  - ③関連機関との連携と自主的な探究活動の推進

## (5) 運営指導委員による指導・助言

### 運営指導委員

「くまの学彩」は1年生については1学期の取り組みを示しているが、2年生と3年生のときの「くまの学彩」はどのようなイメージで考えているのか。3年間の見通しを教えてください。

### 新宮高校教職員

2年次は総合的な探究の時間と「くまの学彩」の2時間で、今までやってきた探究活動をより時間をかけて深めていきたい。今の段階ではターム制を導入して、1学期のしばらくの期間は「くまの学彩」を固めてテーマ決め、課題決め、中間発表まで進んだ上で、一度切り替えて探究に関するスキル学習をする。そして次のタームに移っていくというようなことを考えている。ターム制を導入するにしても、教科横断的な要素を入れる等、何か新しいことができないかと考えている。

### 新宮高校教職員

1年生には多くの分野に関して知識をインプットし、「もし探究するならこのテーマについてはこのような課題を解決する必要がある」といったこと等を考えさせている。2年生になると地域の課題や現代的、国際的な課題をきちんと探究して中間発表や最終発表につなげる。最終学年では下級生を対象に発表したり、成果についての論文の冊子を作ったり、市役所や町役場、地域の方々にもご覧いただき、ご助言、ご意見もいただく。探究が足りない課題については下級生が引き継ぎ、新宮高校の一つの学びが確立してサイクルになっていけばよい。

### 運営指導委員

1年生では総合的な探究の時間と「くまの学彩」が分かれていて、「くまの学彩」はそれぞれの生徒の興味・関心を広げ、2年生以降や1年生の総合的な探究の時間で行う課題設定に直接関わる部分になると思う。視野を広げていく、興味・関心を広げていくという役割が1年生の「くまの学彩」にあるとわかった。

1年生の総合的な探究の時間は、探究活動の基礎的なスキルを学ぶという位置付けだと思った。1年生のところでは「くまの学彩」と総合的な探究の時間の関係やそれぞれの独自性がはっきり出てきたという印象を持っている。2年生、3年生のところで「くまの学彩」と総合的な探究の時間の独自性を保ちつつ、どのように関連付けていくのかが課題になる。

総合的な探究の時間の探究を支えるために、「くまの学彩」でターム制でスキルを集中的に学ぶのも確かに一つの手である。1、2年生の「くまの学彩」の目的を引き継いで、より広く視点を持つような方向に「くまの学彩」の位置付けを取り、総合的な探究の時間と関連付けるといったやり方もある。この関係のところが今後の大きな課題となると感じた。

### 運営指導委員

3週1セットで「くまの学彩」を1年生で4月からしているという認識で良いのか。

### 新宮高校教職員

昨年度末の段階ではその予定だったが、いろいろ考えて今年度は取り組みの回数を増やしている。前年度の計画の段階では3週1セットで行う予定だったが、実際に講師の先生の予定を調整する中で、なかなか3週1セットに調整できなかった。そのことがきっかけで、可能な限り毎週違う方に来ていただくようにしている。スタートが5月末からになったが、今週で第4回の人権の回になる。

### 運営指導委員

一つ一つ授業をしてもらい、子どもたちがこのような問題が今あり、このように解決しようとしていることを学ぶという形、いろいろな分野を学ぶという形になっているのか。

また、これが続いていき、2年生になったときに自分の興味がある分野、あるいは将来考えている分野について探究するという形をとろうとしているという考え方で良いか。

### 新宮高校教職員

一つ一つをじっくり深く学ぶというよりは、講師の先生にはすべてを解説していただく講義ではなく、生徒の中に課題意識や疑問が残るような講演をしていただければとお願いしている。

後者については、その通りに考えている。

### 運営指導委員

2年生では「くまの学彩」と総合的な探究の時間の授業が連続であって、2時間の間に自分が持っている課題について毎週探究していくという形か。2年生のときにどうするかはまだ決まっていないということか。

### 新宮高校教職員

1年生で各講演の記録を残すようにしていて、2年生ではその中から自分の興味のあるものを選んで、決めた1つのテーマについて1年間をかけて探究活動をしていくという形をとろうとしている。

### 運営指導委員

2年生の時には新たに先生に来てもらうことはなくて、自分たちだけでやっていくということか。

### 新宮高校教職員

今の時点では（自分たちでやっていく予定にしている）。その中ではインタビュー等も考えている。

### 運営指導委員

「くまの学彩」は3学期までは毎週金曜日6限目にずっと続いていくという考え方でいいか。

また、現場訪問は1年生でするのか、2年生でするのか。ドクターヘリの現場を見に来てもらっても良いと思う。もし可能であれば授業もする。

### 新宮高校教職員

くまの学彩については、その予定で計画している。

訪問は1年生のときに行く予定にしている。まだ具体的には決まっていないが、候補は考えている。

### コーディネーター

「くまの学彩」は基本的にはインプットの期間を設けている。2学期、3学期も生徒たちが興味を持てる内容で講師を探している。和歌山県立医科大学の方にもお手伝いをお願いしようと思っていたところである。地域医療の課題等を生徒に話していただくようなご講義をお願いしたい。現在の医学の状況やトレンド等も生徒たちに話していただいて、生徒たちが広い視野で課題を持てるようにしていただければと思う。

### 運営指導委員

新宮医療圏の医療問題は大変である。どこに住んでいても安心して暮らせる状態を作らなければならない。新宮では産婦人科問題が非常に大きな問題である。それについて、県として、大学としてどのような取り組みをするか。（和歌山県立医科大学は）入試で産科枠を設けた。1つの科を指定して入試を作ったのは和歌山県立医科大学が初めてである。いろいろな取り組みをしていることを新宮の子どもたちに知ってもらいたい。医療政策をどう考えてやっているのかということも高校生に聞いてもらったら良いと思う。

### コーディネーター

1年生の「くまの学彩」の方でもお願いしたいが、全校生徒に対してや3年生の進路においても和歌山県立医科大学の方からお話をいただけるとありがたい。

### 新宮高校教職員

「くまの学彩」は探究的な学びを1つの主題に置いているが、1年生のうちからインプッ



トするというのは自分の興味・関心、ひいては将来のキャリアにつながる。様々な分野に興味を持つことと、さらにキャリア教育にもつながっていければと考えている。

#### 運営指導委員

探究の基本的な流れを1年生が学んだときに、情報収集や整理・分析・まとめ等の流れの大筋は学んでいるのか。

#### 新宮高校教職員

例年1年生の段階で短いサイクルでやってみることで、サイクルを学んでいる。1年生の時点で大まかな探究のサイクル、流れ自体は理解していると思う。

#### 運営指導委員

その流れの中で、子どもたちが未知の課題に対して答えを見つけていくような活動が楽しいと思えるようになれば、2年生、3年生に向けてより良い活動ができるのではないか。評価についても今後研究していってもらいたい。

#### 新宮高校教職員

2年次、3年次の「くまの学彩」と総合的な探究の時間をどう組み立てていくかを考えているところだが、ターム制をとる方法もあるし、独自性を考えると1年生の「くまの学彩」を2年次以降、より発展させていく形もあるとお話をいただいた。具体的にどのような取り組みが考えられるか。

#### 運営指導委員

探究のサイクルは4つのプロセス（課題設定、情報収集、情報の分析・整理、まとめ・表現）を経て、一つのサイクルになっている。それぞれのプロセスの中でそれを遂行するためのスキルが必要になる。そのようなスキルを2年生の「くまの学彩」のどこかで集中的に学ぶような授業を考えるのは1つのやり方としてある。

1年生のときの「くまの学彩」は1回ずついろいろな方が来られて、生徒の興味・関心を広げていくという位置付けであるのならば、2年生のときにはテーマ設定をして、そのテーマに即して何回か連続でゲストに来ていただく。一つの問題を様々な人の視点で見ることが探究をするときに大切だと思う。

奈良女子大学附属小学校でよくされているのは、一つの物事をいろいろな人の視点で見るということ。例えば阪神淡路大震災のことをとり上げて、まず震災で家を失った人に来てもらう。次は家を失った人を支援している人に来てもらい、その次には支援する人をコーディネートする行政側の人に来てもらう。一つの物事に関わっているいろいろな人たちに、それぞれの視点からその物事をどのように捉え、どのように感じ、どのようにこれまで

活動されてきたのかを話してもらおうと、一つの物事を多角的、多様な視点で見ることができ  
る。そのような形で1年生の「くまの学彩」を引き継いでいくこともできる。

「くまの学彩」と総合的な探究の時間のところはターム制という話もあったが、その両方  
を組み合わせる形もとれる。

### 運営指導委員

総合的な探究の時間の3年間の計画を見ると、3年生のところにやや違和感がある。3年  
生の位置付けのコンセプトは1年生、2年生で学んできた探究の成果を何らかの形で表現  
し、そして表現する技能・力を培うところにあると思う。そこは踏襲しつつ、どのような活  
動をしていくかについては再検討してもいいのではと思った。

京都の堀川高校では、自分たちが探究して調査をした成果をまとめるだけでなく、自分  
たちの探究の履歴のようなものをまとめている。成果を簡潔にまとめるのではなく、自分た  
ちが試行錯誤したことやうまくいかなかったこと等も含めて、自分たちの探究の歩みを書  
き残す。3年生が残した歩みが1年生の教材として使われている。1年生が探究の4プロセ  
スを学ぶだけでなく、探究のプロセスを経験してきた3年生がどのような壁にぶつかった  
のか、どのよううまくいかなかったことがあるのか、どのような先生に話を聞いて良かつ  
たのかということ学ぶこと自体にも意味がある。3年生になったからこそ書けるような  
ものをどこかで位置付けるというものもある。

表現のところでは、取り組んできた調査や調べ学習の成果の最終総括、あるいは2年生の  
総合的な探究の時間だと発表するためのまとめを作っていく中で次の課題を見つけさせる。  
探究のサイクルを何度か回し、探究のつなぎ目のところに表現が入っているものとして、表  
現をとらえる見方がある。

「表現」と言ったときに、学術的なものだと論文やレポートという形で表現することがで  
きるが、成果を作品のようなものとして残すこともできる。例えば、熊野で地域興しのため  
に新たな特産物のお菓子を作るということを考えたときに、実際にその物自体を作るとい  
う表現の仕方もある。他国では、レポートだけでなくYouTube 配信も作品の成果の発表の  
機会と捉える。表現の多様性を確保することも少し検討してみてもどうか。

評価に関連するが、総合的な探究の時間で探究をしていくときに、振り返りだけではなく、  
探究のプロセスそのものを記録するフォーマットも新宮高校の改革事業の独自のものとし  
て考えてみるのもある。

### 運営指導委員

子どもたちに探究の仕方を誰がどのように教えていくのか。

### 運営指導委員

課題設定におけるスキルや能力を養うために、1年生の探究活動の1回目では学校側で

テーマ設定をすとなっている。スキルを学びやすいテーマや、3年生が以前探究のテーマとしてしっかりやっていたものを使って、試行錯誤なく、効率的に探究のプロセスをたどらせるというやり方をとりながら、スキルを教えるということも方法の一つである。

実際にはそれぞれの高校の担当の先生がスキルを教えることになる。高校の先生にスキルのことを勉強してもらわないと難しくなる。今だと探究のスキルに特化した本が出ている。例えば情報収集においては、研究者は一次資料と二次資料の分析の仕方は違うということを経験的に学んできている。そのようなことを高校の先生に学んでもらって、その違いや分析方法を生徒たちに教えていくことが必要になると思う。

スキル学習は資料の分析方法等の一般的なスキルの学習になるので、実際の探究になると、専門家の人たちに頼りながら情報やアドバイスをもらわなければ、なかなか探究自体を進めることは難しい。コーディネーターや協力してくださる先生方の出番が必要になる。

#### コーディネーター

どのように探究の力をつけるかということだが、他の高校の取り組みで、大学の先生に自分の研究の進め方について高校生にわかる範囲で話をさせていただき、先生方の話を聞くことによって探究のレベルが上がっていくというものもあった。先生方のご自分の研究の進め方について協力をいただけたら大変ありがたい。

#### (6) 今後の予定について

##### 第2回運営指導委員会

11月24日に総合的な探究の時間の探究発表会を予定しているので、その頃を中心に計画する。

## 2. 和歌山県立新宮高等学校 第1回運営指導委員会（2）

日時 : 令和5年6月28日（水） 10:30～11:30  
場所 : 新宮高校 コミュニティルーム  
出席者 : 運営指導委員  
          コーディネーター  
          新宮高校教職員

### 概要

- (1) 校長挨拶
- (2) 運営指導委員の紹介  
    コーディネーター・新宮高校教職員の紹介
- (3) 「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の取組状況について

#### ①学校設定科目「くまの学彩」

##### 新宮高校教職員

①地域・②国内・③国外・④共通という4つのカテゴリーで、様々な分野の講演会やオンライン講義、体験学習などを行う予定である。授業後に生徒は振り返りシートに記入し、2年次以降の探究のテーマ決めの参考にする。

##### 運営指導委員

振り返りシート記入は良いと思う。振り返りシート記入後、生徒たちが互いに話し合ったり、発表して書いたことを共有したりする場を設けているのか。

##### 新宮高校教職員

計画はしていなかったが、学期の中間や最後に共有する機会を設定したい。

##### 運営指導委員

振り返りは重要である。そしてそれを共有する場を持ち、友人の視点から学ぶことが大切である。その後にもまた振り返りを書かせるとさらに深まる。その時間の確保をするのがよい。お互いを磨き合う場を設定することが大切である。

## ②総合的な探究の時間

### 新宮高校教職員

- 1 学年…探究計画書を作成する。
- 2 学年…11月にポスター発表を行う。中間発表の機会を増やしている。
- 3 学年…地域の課題と解決策を小論文にまとめる。

### 運営指導委員

総合的な探究の時間のテーマについて、3年生は地域の課題についてとテーマがはっきりしているが、1、2年生の探究のテーマは自由に選択するのか。それとも学年としての大きなテーマがあり、その中でテーマを設定していくのか。

### 新宮高校教職員

1年では地域の課題を見つけてテーマを設定する。2年では国内外に目を向けてテーマを決める。3年では視野を広げた上でこの地域に戻るという大きなコンセプトがあるが、現状は生徒の興味・関心に応じたものになっている。

### 新宮高校教職員

「熊野地域をより良い地域にするためにはどうしたらよいか。」のような大テーマを生徒に与えたい。その中で地域や日本国内、世界の課題について個々の生徒の興味・関心に従ってテーマを設定すれば良いと思う。そのように1年、2年で探究し、3年ではそれまでの学びを下級生や外部に発信するなどして、学年で学びを完結するのではなく、探究したことを、学年を超えて循環して積み上げていくような形にしていきたい。

### 運営指導委員

- ・熊野の自然、文化、産業等、生徒に熊野のカテゴリーを与えておくとテーマを設定しやすい。
- ・仮説の設定方法について  
川喜田二郎の『W型』…調査→実行・実践→仮説を立てる  
(フィールドワーク→データを取る→仮説を立てる)  
仮説を立てるときはこのような方法を考えてはどうか。
- ・担任と副担任の関わりが要になる。教員が生徒と良い関わり方をするには二つの方法がある。
  1. 教員自身がテーマを持って熊野のことを調べ、発表する。
  2. オンライン等の集中講座で教員にインプットする。
- ・3年生の小論文において、熊野地方が抱えている問題は書籍やインターネットで調

べるだけでは表層的になる。実際に現場に行き話を聞かせてもらったり、新宮市教育委員会が所有している地域の書籍を利用したりすれば、論文の質も上がる。

#### 新宮高校教職員

- ・図書館の司書にも協力してもらっている。
- ・今年度は選挙公報や市役所発行の冊子から地域の課題を見つける等、利用している。

### ③カリキュラム開発

#### 新宮高校教職員

学校設定科目を各学年に1単位設定するにあたって全体のバランスを考えた。これまで文系・理系の系統を定めて科目を提示するという形だったが、2年生、3年生は生徒たちが選択群の科目の中から選んで、学びたいことを学んでいくというカリキュラムにした。

### ④教科横断型授業・授業改革

#### 新宮高校教職員

教科横断型授業は、昨年度は教員を10グループに分けて研究授業を行った。今年度はまだ具体的な取り組みはスタートできていない。評価の仕方について検討中である。

#### 運営指導委員

教科横断型授業についてどのようなイメージを持っているのか。

#### 新宮高校教職員

身に付けさせたい大きなテーマや概念があれば良いと思っているが、今は各教科の取り組みになっている。

#### 運営指導委員

- ・教員同士でこのようなテーマでやったら面白いのではないかと話し合う。
- ・共通項を見つけ出すような場を持つと良い。

### ⑤その他の取組

- ・大学訪問
- ・教職員による先進校視察
- ・自主的な探究活動の推進
- ・事業に関するアンケートの作成と実施（生徒・教職員対象）、広報活動

#### (4) 取組における課題について

- ①カリキュラム開発・教科横断型授業・授業改革
- ②学校設定科目「くまの学彩」や総合的な探究の時間の評価方法の研究
- ③関連機関との連携と自主的な探究活動の推進

#### (5) 運営指導委員による指導・助言

##### 運営指導委員

・カリキュラム、「くまの学彩」、総合的な探究の時間の枠組み、仕組み等、制度面の中身が充実してきている。スタート時としては枠組みは十分である。

・今後の課題

生徒を学習の主人公として位置付けたときに、取り組みの中で生徒の学びが相互に関連し、その関連の中から学びが広まったり、深まっていくのをいかに見取るか。

→調整する点

1. 「くまの学彩」の振り返りシートで大テーマを与えた上で、疑問点や探究活動をするならどのような問いを立てるかを書く前に、講演の要点を書かせ、要点として書いたことが自分にとってどのような意味を持つのか、自分の過去の経験とどうつながるのかという問いを間に挟むと、探究活動をしていく上で主体的な活動につながるのではないか。
2. 教員の役割について、地域に関する知見を広げる方向で教員の研鑽や教育活動を推進するというものもあるが、あえて自分の教科の専門性を超えて新しいことをするのはなく、生徒の振り返りシートを見て、普段の各教科の授業と「くまの学彩」や総合的な探究の時間の学びがどうつながるのかを考えて授業改善をしていくということも一つの選択肢としてあるのではないか。

##### 運営指導委員

・振り返りの際の文章表現が大切である。

1. 生徒自身が何を聞いて、何を学んだのかを整理させる。
2. それを聞いてどう思ったか、どう考えたか、情意を書かせる。体験の加工である。

・生徒に文章を書かせると、出現頻度の高いワード等のデータが取れる。そうすると数値化ができ、どのような教育効果があったか、生徒の変容を客観的に評価できる。教師にとっても、自分が行ったことが数値と図で評価できる。

##### 運営指導委員

教科横断型授業では教員同士で話すことが大切である。カリキュラムの中で自由度が限られている部分もあるので、中学校などでは教科別の年間指導計画を並べてみて、教科横断できる分野を提案することがある。

## 運営指導委員

研究指定への取り組みを楽しんでください。

6月21日（水）の運営指導委員会（オンライン会議）でいただいた意見・質問

- ・「くまの学彩」の3年間の計画はどうなっているのか。
- ・「くまの学彩」と総合的な探究の時間の独自性を保ちつつ、どのように関連付けていくのが課題になる。
- ・体験学習等の予定はあるか。

（6）今後の予定について

第2回運営指導委員会

11月24日に総合的な探究の時間の探究発表会を予定しているので、その頃を中心に計画する。



### 3. 和歌山県立新宮高等学校 第2回運営指導委員会

日時 : 令和5年11月24日(金) 14:20~15:30  
場所 : 和歌山県立新宮高等学校 視聴覚3・オンライン  
出席者 : 運営指導委員  
          コーディネーター  
          新宮高校教職員

#### 概要

- (1) 校長挨拶
  - (2) 運営指導委員の紹介  
    コーディネーター・新宮高等学校教職員の紹介
  - (3) 「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の取組状況について
- (A) 令和5年度(第2年次)の経過報告

#### ①教育課程について

##### 新宮高校教職員

- ・令和5年度入学生から学校設定科目「くまの学彩」を各学年に1単位ずつ設定した。
- ・文理の枠組みをなくした。
- ・生徒自身が自由に科目を選択するのは難しく、また、大学入試を見据えたものにするために3パターンの選択肢を提示した。

#### ②授業改革

##### 新宮高校教職員

- ・研究授業を実施。「探究的な学び」とICT端末の利用を意識した授業をする。
- ・キャリア研究部が探究的な学びに関する資料を作成してサポートしてくれている。

#### ③学校設定科目「くまの学彩」(1学年)

##### 新宮高校教職員

- ・1学年で金曜日の6限に実施している。
- ・原則外部講師による講演会やオンライン講演、校外学習を実施している。
- ・1学年の「くまの学彩」のねらいは生徒の興味・関心の幅を広げることである。
- ・振り返りシートを事前に配布し、講演中にメモをとらせている。
- ・次年度の課題
  - 1. 「地域」、「国内」、「国外」、「共通」の 카테고リーに分けているので、なるべく内容の偏りが出ないように設定をしていく。

2. 普通科改革支援事業終了後もこの形式で授業を展開するなら工夫が必要である。公的な出張講座や地域の方による講演、オンライン講演等、来年はより持続していけるように段取りしていく必要がある。
3. 先を見越した計画を立て、事前学習や事後学習の機会を設ける。
4. ふり返しシートをブラッシュアップする。

#### ④「総合的な探究の時間」（1・2学年）

##### 新宮高校教職員

令和5年度の取組について

##### 1. 1学年

- ・1学年は「2年次の探究活動に向け、探究の基礎を学び、探究活動を体験する」というねらいで1年間探究活動を行ってきた。例年、学年でワークシートや授業で取り組む内容を考えてきたが、今年度からは来年度以降に引き継いでいくことができる仕組みづくりにも取り組んでいる。
- ・1学期は探究活動のガイダンスやカードゲームを用いて問い・仮説を考える活動、パワーポイント作成等を行った。
- ・2学期以降は各クラス内でグループを作り、課題やテーマについて調べ、問いを立て、仮説を設定するという、探究の練習を行っているところである。
- ・今年度の重点的な取組として、「探究計画書」を各グループで作成している。テーマや問い、仮説とは何かを1年生のうちに理解してもらえるのではないかと考えている。
- ・今後クラス内発表を実施し、そこでの質疑応答や担任からのアドバイスを踏まえてもう一度探究活動を行い、年度末にクラスの垣根を越えた発表をする予定である。探究のサイクルを意識させたいと考えている。

##### 2. 2学年

- ・2学年は年間を通じて探究活動を行っている。1学期からクラスでグループを組み、グループごとにテーマを設定し、中間発表まで1学期の段階で終えた。
- ・2学期は中間発表を踏まえて、ポスター発表に向けた探究活動を行っているところである。
- ・ポスター発表は中間報告という意味合いで、そこで終わりではなく、そこからさらにサイクルを発展的に継続させていかなければならないという意識づけを教員にも生徒にもしているところである。
- ・3学期以降に成果物をまとめる予定である。
- ・「質問票」が今年度新しく取り組んだことである。これまでポスター発表会での質疑応答の時間になかなか質問が出ないことが課題だったので、今年度は質問

のサンプルを生徒に持たせるようにした。将来的には「質問票」は1年生にだけ渡し、2年生は自分たちで考えた質問ができるよう、段階を踏んだ指導ができればと考えている。今年度に関しては1年生、2年生両方に持たせている。

#### ⑤その他の取組

- ・教職員による先進校視察（9月）

##### 新宮高校教職員

#### 1. 福岡県立八幡高等学校

- ・昨年度から普通科改革支援事業の学際領域学科の指定を受けている高校で、来年度に文理共創科を開設する予定である。
- ・「総合的な探究の時間」の探究活動を「夢現∞プロジェクト」と題して取り組んでいる。
- ・令和元年度から教科横断型授業に取り組んでいる。来年度から「知の統合」という科目、1単位として実施していく予定である。
- ・常駐のコーディネーターがいる。
- ・コンソーシアムの方が「総合的な探究の時間」の授業に参加し、生徒に助言している。

#### 2. 福岡県立城南高等学校

- ・平成7年度から「ドリカムプラン」を実施している全国屈指のキャリア教育推進校である。普通科に理数コースがあり、SSHの取組に重点的に取り組んでいる。
- ・「ドリカムBOOK」という、3年間を通して探究活動や進路学習の指針となる本を作成している。
- ・デザイン会議やトライアル会議等、組織的なものがつくられている。
- ・SSHならではの「SS情報統計」という学校設定科目をつくっていたり、「即興型英語ディベート」を実施したりしている。

##### 新宮高校教職員

#### 3. 京都市立堀川高等学校

- ・ポスター発表を参観した。生徒が探究を楽しんでいる様子が見て取れた。
- ・分野ごとのゼミに分かれて個人探究を行っている。自分がしたいテーマで、自分がしたいことを、その専門の先生の指導を受けながら探究するということに、生徒の楽しそうな様子が出ているのではないか。
- ・ゼミ活動では、担当教員はついていないが、生徒が授業を運営していた。生徒の主体性が見て取れた。

#### 4. 和歌山県立向陽高等学校

- ・SSH の成果報告会への出席と SSH のクラスの探究活動を参観した。
- ・生徒たちが非常に楽しそうだった。参観者の質問に対しても全部答え、楽しそうに語ってくれたことが印象的だった。

### (B) 令和 6 年度（第 3 年次）に向けての課題

#### ①教育課程について

##### 新宮高校教職員

#### 1. 教科横断的な視点で考える教育課程

生徒の視点に立って、効果的なタイミングを考えながら、学ぶ時期を考える必要がある。

#### 2. 教科横断的な意味も含めた評価の在り方

「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」を核として、そこから全教科に落とし込んでいけるような評価基準の必要性を感じている。教育課程の中での評価が今後の課題である。

#### ②来年度 2 学年の「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」での探究的な学びについて

##### 新宮高校教職員

#### 1. 1 学年

- ・年間を通じて探究の基礎を学んでいるが、「問い」、「課題」、「仮説」という言葉がピンとこない生徒が多い。
- ・来年度は 1 年生の早い段階で 3 年生の探究の発表会を見せ、今後の 3 年間の活動をイメージしやすくする。
- ・探究の基礎を教える段階での教材が下の学年に確実に伝わっていくようにする。

#### 2. 2 学年

- ・「総合的な探究の時間」が週 1 時間しかなく、各クラス担任が 40 人を担当しているので、生徒の探究の時間を十分に確保できていない。担任も 1 人で 10 グループ程見なければならないので、適切にサポートできていない。
- ・来年度は「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」を結びつけ、十分な探究活動の時間を確保していきたい。

#### 3. これからの新宮高校の探究学習の流れ

- ・1 学年は、「総合的な探究の時間」では探究の基礎を学ぶ。「くまの学彩」では地域の方のお力添えをいただいて、社会の諸課題について触れる。

- ・2学年は、「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」の時間を組み合わせてテーマ設定をした上で、クラスを越えて、探究したいテーマに応じて生徒のグルーピングができればと考えている。
- ・3学年は、「総合的な探究の時間」では2年次の探究の成果をまとめ、進路探究で自己の在り方や生き方を考える。「くまの学彩」では2年次の探究の成果を後輩や地域に還元する時間を取りたい。「地域へ」というところをコンセプトにしている。
- ・探究が「総合的な探究の時間」だけで終わらないように、各教科・科目の授業の中にも探究的な学びを取り入れ、将来的には学校の教育活動全般の中で探究的な視点を入れていければと考えている。

#### (4) 運営指導委員による指導・助言

##### 運営指導委員

「くまの学彩」の資料内で「地域」、「国内」、「国外」、「共通」の分類があり、その横に「観光」、「環境」、「食糧問題」、「人権」等のキーワードが入っているが、これは何か社会問題を分類したものがあるのか。それともその時々でラベリングしているのか。

##### 新宮高校教職員

どちらの意味合いもあるが、2年生の探究でテーマ設定する時のジャンル分けやグルーピングのために、ある程度統一感を持たせたいと考えている。

##### 運営指導委員

- ・テーマの偏りがないように、様々な問題を扱うのが一つの方法である。分類したキーワードをどれぐらい設定して、バランス良くするか考えても良いのではないかな。
- ・探究そのもののイメージを1年生のときからどのように持たせるかということは、探究していく際に重要である。3年生の探究の発表を見せることは大切なことだと思う。
- ・堀川高校では、3年生が探究の成果と探究のプロセスを1年生に話したり、文集のような記録として残したりしている。下の学年の生徒にとっては探究をイメージするときにはわかりやすいと思う。3年生自身も、成果の発表だけでなく、成果に至るまでの経験をまとめる機会にもなるので、検討してもらいたい。
- ・いかに生徒たちに授業外で探究をするという動機や機会を設定するのかということが大切な視点になってくる。授業外のことにも目を向けるという視点も大切になる。
- ・探究の振り返りや計画書を考える時に、『高校生のための「探究」学習図鑑』という本がある。探究のプロセスを高校生にどのように伝えるのかがよくまとまっている本である。ワークシートも多く入っている。評価の方では、『高等学校「探究的な学習」の評価』という本がある。実際の高校のルーブリックが紹介されている。探究学習の評価を考える時

に、様々な資料が入っているので参考になるのではないか。

#### 運営指導委員

- ・先生方が一生懸命されているので頑張ってもらいたい。
- ・専門性の高い人が高校生に説明をすると良い。

#### 新宮高校教職員

- ・1学年の「くまの学彩」で専門性の高い方に講演をお願いしたい。
- ・今年度「くまの学彩」で興味・関心を広げた子どもたちが、来年の探究活動で地域医療をテーマにする時には、専門性の高い方にご指導・ご助言をお願いしたい。

#### 運営指導委員

新宮地方の医療体制、県の中心部から遠い地域の医療をどうするかということに関して考えなければならない。高校生にいろいろな考え方を持ってもらうことが大事だと思う。

#### 運営指導委員

生徒の成果物を電子化しているのか、紙ベースになっているのか。紙ベースならどのような形でファイリングしているのか。

#### 新宮高校教職員

- ・ふり返しシートは現在紙ベースになっている。まだ電子化には至っていない。
- ・生徒は一人一台端末を持っているが、一度紙に書いたものを一斉に打ち直す時間の確保が難しいことや、端末 200 台を同時に動かすとうまく機能しない問題がある。生徒全員に打ち込ませることができていないのが現状である。

#### 運営指導委員

- ・1年生の「くまの学彩」では生徒全員が講演を聞いてふり返しシートを書き、書いたものを活かしながら次年度の探究につなげることがねらいである。生徒が2年生に進級して探究しようと思った時に、自分が書いたものが電子化されていると一目瞭然である。また、それらを生徒自身が並べて見ることで、自分自身の核となる問題関心に気づく可能性も出てくるのではないか。
- ・ある程度電子化しないと、多種多様な講演を聞いてもその場限りの断片的な知識になってしまう。
- ・学習の成果を、紙ベースのものであっても生徒自身が繰り返し見ることができるようなシステムが大切である。

- ・下級生に継承するところまでいなくても、自分自身が全体を振り返られるような、学びの一貫性、継続性を担保するような形で成果物を残す必要がある。
- ・東京学芸大学先端教育人材育成推進機構に「高校探究プロジェクト」というホームページがあり、各教科と「総合的な探究の時間」のツールキットが並べられている。各教科のツールキットが充実しており、授業改善と探究につながっていくのではないかな。
- ・来年度の探究学習は、1年生は基本的にクラス単位で実施し、2年生はクラスの壁を越えてグループを編成するということがあったが、生徒の興味・関心をどう集めて、どのようにグループを編成するのか。意欲が不十分な生徒のモチベーションを高めるために、教員がどのように指導するのか。外部の専門家がどのタイミングで、どのチームに関わることが最も適切なのか。そのようなノウハウをSSH認定校は持っている。早期にSSH認定校の視察等をして、情報収集と来年度の体制を組むことが喫緊の課題ではないかな。
- ・「探究計画書」の「Ⅱ グループの探究の問い」と「Ⅲ 問いの仮説」の間に「フィールドワーク」や「調査」、「実験」、「専門家に対するインタビュー」等を入れた方が、より中身が濃いものになるのではないかな。

#### 運営指導委員

- ・「探究計画書」はもう少し工夫が必要である。他の学校や『高校生のための「探究」学習図鑑』の計画書も参考にしながら、どの程度まで作り込むのかは、教員の労力とのバランスになると思う。
- ・計画書だけでなく、ポートフォリオ的な形で探究のプロセスそのものを記録として残す。しかも電子化と組み合わせていくのが望ましい。どの程度まで探究の計画書や探究のプロセスの記録を作っているのかは、新宮高校の方で考えてもらいたい。

#### (6) 今後の予定について

第3回運営指導委員会を令和6年2月頃に予定している。

#### 4. 和歌山県立新宮高等学校 第3回運営指導委員会

日時 : 令和6年2月28日(水) 14:30~15:30  
場所 : 和歌山県立新宮高等学校 視聴覚3・オンライン  
出席者 : 運営指導委員  
          コーディネーター  
          新宮高校教職員

##### 概要

- (1) 校長挨拶
- (2) 運営指導委員の紹介  
    コーディネーター・新宮高等学校教職員の紹介
- (3) 「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」の取組状況について
  - (A) 令和5年度(第2年次)の総括
    - ①教育課程
    - ②学校設定科目「くまの学彩」(1学年)
    - ③「総合的な探究の時間」(1・2学年)
    - ④授業研究
    - ⑤教職員による先進校視察
  - (B) 令和7年度新学科設置に向けての令和6年度(第3年次)の取組
    - ①2学年の「総合的な探究の時間」と「くまの学彩」での課題探究
    - ②探究学習の評価の開発
    - ③授業研究
    - ④校内研修体制の確立
    - ⑤教職員による先進校視察
    - ⑥その他
- (4) 運営指導委員による指導・助言
- (5) 今後の予定について  
    令和6年度 第1回運営指導委員会 令和6年5月~6月頃(予定)



## IV 次年度以降の活動について

## 今年度の成果と今後の展開について

令和4年度の課題を引き継ぎ、今年度は、①学際的な学び・文理融合型の学び、多様な進路希望に対応できるカリキュラム開発、②「総合的な学習の時間」の充実・深化、③学校設定教科・科目「くまの学彩」（1学年）の実践、④教科横断型・探究的な学び・ICTの活用を意識した授業研究を、重点的な課題として取り組んだ。個々の具体的な成果と課題については「Ⅱ 具体的な研究開発報告」でまとめた通りであるが、それぞれについて、今後も検討を重ね、改善を繰り返したい。①については、令和5年度入学生より新たな教育課程がスタートしているが、令和7年度に控える新学科の設置に向け、現在も検討を続けているところである。②の「総合的な探究の時間」における課題探究は、本校が今後教育の柱の一つとする探究的な学びの中心に位置づけられる。前年の取組を踏襲するのではなく、教職員全体で短期的・中長期的なPDCAサイクルを意識して常に改善を図っていききたい。③の「くまの学彩」に関しては、今年度は1学年のみでの実施となったが、令和6年度より2学年でも取組が開始される。2学年・3学年の指導計画の開発・充実はもとより、今年度実施した1学年の取組についても、持続可能な取組となるよう、引き続き内容を精査する。また、探究的な学びとは「総合的な探究の時間」「くまの学彩」のみで行われるものではなく、各教科科目等の授業においても実践されることが求められるため、④の授業研究についても、令和6年度も教職員が一丸となって組織的に取り組みたい。

今後も「総合的な探究の時間」「くまの学彩」「各教科科目等における探究学習」で活用できる評価方法の開発、先進校訪問、現職教育で教職員の探究学習への理解を深めること、コーディネーターとの協働による外部機関との連携など、これまでの取組をさらに推し進め、課題の解決、新学科の魅力化により一層取り組みたい。

和歌山県教育委員会

令和4年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

## 和歌山県立新宮高等学校 学際領域学科（令和6年度）

### 【学際領域学科設置の目的】

現代社会はSociety5.0の到来など変化が激しく、予測不能で多様な課題が生じている。課題解決のためには、①さまざまな領域の知識や技能、②多くの情報を統合しながら、課題解決に結びつけていく力、③主体的にまた他者と協働して課題解決に向かえる力が必要。

育成する  
資質  
能力

- ①分野にとらわれない幅広い知識、豊富な技能を身に付け、活用できる力。
- ②創造的・批判的思考力
- ③主体性・協働性・市民性

育成する  
人物  
像

- ・物事を多面的・包括的に捉え、人や自然・文化を大切にできる人物
- ・地元地域や国内外でイノベーターとして活躍できる人物

### 【特色・魅力ある教育の概要】

- ①最先端の幅広い知識に触れたり、ホンモノを体験したりする機会を増やす。
- ②①・②をふまえ、考えや提案を説言・発表することを推奨し、学びが実社会とつながる経験を大切にします。
- ③分野や教科の枠を超えた学びを実現する。

- ・令和5年度より、学校設定教科・科目「くまの学彩」を開設する。
- ・総合的な探究の時間の取組を充実させる。
- ・探究型学習や分野・教科横断的な学びの機会を充実させる。

### 令和4年度の目標

- ①学際的な学びを実現できるカリキュラムの開発を行う。
- ②分野・教科横断的な学びの取り入れ方を研究する。
- ③学校設定教科・科目を検討する。
- ④総合的な探究の時間の取組を深化させる。
- ⑤コーディネーターと協力して、地元企業や地域住民、大学、研究機関等との連携を強め、生徒が体験できる機会を増やす。
- ⑥発信力を養う。

### 取組状況

- ①②③④⑤⑥  
・校内にキャリア研究部とビジョン委員会を設け、会議等を継続しながらカリキュラム開発を行っている。
- ・運営指導委員会を3回実施し、助言・指導を受けた。
- ・令和5年度より、学校設定教科・科目「くまの学彩」の設置・実施を決め、内容や方法を検討している。
- ・総合的な探究の時間の見直しや「くまの学彩」の実施を見据えて、試行的な取組を実施している。
- ・教科横断型授業の実施している。
- ④  
・コーディネーターとの協働の場を増やしている。
- ⑤⑥  
・生徒に主体的な探究活動を促す機会を増やしている。

### 関連機関との連携・協働体制の構築方法

企画や取組の方向性を担当教職員とコーディネーターで共有し、運営指導委員の方々とコンソーシアムとして関わっていただいている方々を通じて、連携先を広げるとともに、講演やフィールドワークを重ねる中で、協働体制の構築を図っている。

### 成果と課題

- 成果**
- ・これまでの取組を、分野・教科横断等、学際的な学びという観点から捉え直すことができた。
  - ・教科横断型授業や試行的な取組を実施する中で、学際的な学びへの認識を深め、「くまの学彩」の実施に向けて動き出せた。
- 課題**
- ・総合的な探究の時間や「くまの学彩」でのテーマの精選と指導方法。本校独自の教材作り。評価方法の検討。
  - ・担当教職員とコーディネーターが役割分担しながら、取組を教職員全体に広げ、関連機関との連携をより強めていく。

管理機関名：和歌山県教育委員会 令和5年度 新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）

【和歌山県立新宮高等学校】学際領域学科（令和7年度設置（予定））

【学際領域学科設置の目的・育成する人材像】

学際的な学び・文理融合型の学びを実現し、予測困難な現代社会で活躍できる人材を育てるため。

- ①物事を多面的・包括的に捉え、人や自然・文化を大切にできる人材
- ②地元地域や国内外でイノベーターとして活躍できる人材

【学際領域学科で育みたい資質・能力】

- ①分野にとらわれない幅広い知識・豊富な技能、およびそれらを活用できる力
- ②創造的・批判的思考力
- ③主体性、協働性、市民性

【特色・魅力ある教育の概要】

学際的な学び・文理融合型の学びを実現するため、カリキュラム開発、「総合的な探究の時間」・「くまの学彩」の実践、教科・科目等における教科科目横断型授業・探究的な学びの研究に学校全体で組織的に取り組む

令和5年度の目標

- (A)学際的な学び、文理融合型の学びを実現するためのカリキュラム開発
- (B)「総合的な探究の時間」「くまの学彩」による探究的な学びの充実
- (C)各教科・科目においても探究的な学びを実践するための授業研究

取組状況

- (A)文系・理系のコース選択を徹底、生徒が学びたい科目を主体的に選択
- (B)令和5年度1学年より「くまの学彩」をスタート

- ◇地域・国内・国外・共通のカテゴリーと観光・歴史・医療・環境・スポーツなどのジャンルを組み合わせ、講演会・校外学習を実施。
- ◇最先端・先人の幅広い知識、ホンモノを体験することで現代社会の諸課題に触れ、興味・関心を刺激
- ◇2年次の探究学習のテーマ設定を見据えるとともに、キャリア教育の側面からもカリキュラムを設計

- (C)令和4年度からの教科科目横断型の授業実践に加え、教科指導における「探究的な学び」の授業研究に着手

【運営指導委員会・コンソーシアム】

和歌山大学、和歌山県立医科大学、和歌山県教育委員会、ヤマネ、いきもの研究所、新宮市役所、南紀熊野ジオパークセンター、和歌山県世界遺産センター、東京医療保健大学、新宮ユネスコ協会、東京大学、国立スポーツ科学センター

- ⇒①運営指導委員会における指導・助言
- ⇒②「くまの学彩」での講演・校外学習の企画
- ⇒③「総合的な探究の時間」の課題探究での連携

成果と課題

【成果】

- ◇「くまの学彩」を始動させ、軌道に乗せることができた。「総合的な探究の時間」についても従来取組を見直し、実践内容を精選・発展的に深化させることができた。

【課題】

- ◇学際領域学科の設置に向け、カリキュラム開発を継続すること。
- ◇探究的な学びをより充実させるための体制づくり。

# V 資料

## 1 スクールポリシー

# 新宮高等学校 スクール・ポリシー

### 【全日制課程 普通科】

#### アドミッション・ポリシー

- ・本校での学びを通して、自身の個性や能力を伸ばし、自らの可能性を広げたいという強い意志を持った生徒を求めます。
- ・高い志をもって学習を進め、部活動や学校行事に積極的に取り組む生徒を求めます。
- ・興味・関心の幅が広く、資格取得や地域での活動、ボランティア活動等に前向きに挑戦しようとする生徒を求めます。
- ・いじめや差別を許さない、思いやりの心を持った生徒を求めます。

#### カリキュラム・ポリシー

- ・学ぶ楽しさや知る喜びを実感できるような専門性の高い教育を行います。対話や発表等を重視した共に学びを深められる授業、1人1台端末の活用等で学力の伸長を図ります。
- ・自ら課題を見出し解決していく力、物事をよく考え判断し、新たな価値を創造・提案できる力を育む探究型・課題解決型の教育を展開します。
- ・教科横断的な科目を体系的に編成し、多様な進路に対応できる授業を展開します。
- ・豊かな人間性や社会性を育み、互いを認め合いながら他者と協働する力を高められるよう、地域や専門機関との連携、幅広い年齢層との交流、生徒主体の諸活動の充実を図ります。
- ・外国語によるコミュニケーション能力を高め、異文化理解を深められるよう、姉妹校との交流やさまざまな国際交流企画への積極的な参加、語学に関する資格取得などを推奨します。
- ・部活動や生徒会活動、地域ボランティア活動を推奨し、地域社会の担い手として必要なコミュニケーション能力や倫理観を養います。

#### グラデュエーション・ポリシー

- ・知・徳・体が調和し、地域社会や次世代の日本社会、国際社会におけるさまざまな分野で活躍できる生徒を育成します。
- ・幅広い知識と豊富な技能を身に付け、それらを活用できる生徒を育成します。
- ・課題を見つけ、その解決に向けた取り組みを主体的に進められる生徒を育成します。
- ・素直で真面目な心、強くしなやかで思いやりのある心を持ち、多様な他者とより良い方向を目指してともに活動できる生徒を育成します。

## 2 事業取組状況発表資料

### 県立新宮高等学校が時代に対応した魅力ある学びを推進中

文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の「学際領域」に係る調査研究の指定校（全国20校のうちの1校）に

#### （1）事業について

令和4年度から、和歌山県立新宮高等学校が文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定校に採択されています。全国20校のうちの1校です。その中で、新宮高等学校は、「学際領域」に係る調査研究の指定校として事業に取り組みます。期間は3年間の予定です。

「普通科」において「学際領域」の学びを取り入れることで、さらに特色・魅力ある教育の実現を目指します。この調査研究は、「普通科」を進化させる取り組みです。

#### （2）今、なぜ「学際」なのか？

「学際」とは、教科横断・分野横断・文理融合の学びを意味します。

現在の社会は変化が激しく、SDGSの実現やSociety 5.0の到来に伴う諸課題など、予測不能で多様な課題が生じています。課題を解決していくためには、さまざまな領域の知識や技能が必要とされており、従来の文理別の学習や狭い専門性を極めるだけでは対処できなくなっています。多くの情報を活用しながら、それらを統合し、課題の解決に結びつけていく力が求められています。

今、社会では、課題を自ら見つけて創造的な思考を行い、他者と協働して解決策の提案ができる人が必要とされています。

それに伴い、大学入試も変化しています。教科・科目の知識だけではない幅広い知見、資料を読解する力、問題解決につながる実学的な能力、学びを実社会に生かせる力を測るような出題が増えています。そのため、しっかりとした教科学習に加え、ひとつの問題をその教科だけでなく、他の教科の知識や技能を駆使して解いていく学びや経験することも必須となってきました。

今まさに「学際的な学び」が求められているのです。

#### （3）新宮高等学校の事業での取り組み

- ① 最先端の幅広い知識に触れたり、ホンモノを体験したりする機会を増やします。
- ② 課題解決の知識や技能を磨きます。
- ③ ①②を踏まえ、自らの考えや提案を積極的に外部に発信したり、発表したりすることを推奨し、学びが実社会とつながる経験を大切にします。
- ④ 分野や教科の枠を超えた学びを実現します。

①～④を軸に、カリキュラムや授業の改革を行います。

#### （4）新宮高等学校のカリキュラムのバージョンアップと授業改革

◇学校設定科目「くまの学彩」の開設します。「くまの学彩」の「彩」の字は校歌の「彩雲」を由来とし、熊野の自然や文化・歴史を学ぶことによって、多様な学習活動が展開されることをイメージしています。「学彩」は「がくさい」と読み、教科・分野横断的な学びの意味を込めています。学校設定科目「くまの学彩」では、さまざまな知見者からの体験談や生徒自身の実地体験を通して、課題解決への材料の蓄積を図ります。

◇総合的な探究の時間の取り組みを充実させます。知識や情報を活用するスキルを身に付け、思考力や知的好奇心を高めます。探究活動、ディベート、プレゼンテーション等を通して、実社会に直結した分野横断的な学びを進めます。

◇探究活動の成果を外部機関のコンテスト等で積極的に発表することを促します。

◇授業や探究活動等で関心のある課題について、教科の枠を超えて学べる機会を設けます。

◇各教科の授業において、探究型学習の充実を図り、常に生徒の自発的な学びを促す工夫を試みます。

◇大学や研究機関や地元地域等、関係機関との連携協力体制を整備し、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」において、連携協力を担うコーディネーターを配置します。

令和4年度指定  
新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）  
研究開発報告書 [学際領域学科・第2年次]

発行日 令和6年3月

発行者 和歌山県立新宮高等学校  
校長 深野 泰宏

所在地 〒647-0044

和歌山県新宮市神倉三丁目2番39号

電話 0735-22-8101 Fax 0735-21-2901

H P <https://www.shingu-h.wakayama-c.ed.jp/>